

その翌日の午後である。

沼津へ荷物を取りにやる手配も済ましたあとで、俊子は昨夜あの儘松倉へ泊つた治子や喜三郎達と一緒に奥の茶の間で火鉢を囲みながら相變らず濕つばい話に時を移してゐた。その時玄關の方で突然鈍い自動車の號笛の音が聞えて、誰か來客があるやうな氣勢がしたので、取次に出たお藤にそつと聞いてみると、それは津崎であつた。今日は原田も一緒に、二人とも可成酒氣を帯びてゐて、荒々しい足音を立て乍ら玄關から客間へ通つて行つたと云ふ。それを聞いた丈でももう俊子は息が塞がるやうな思ひがした。

母親は暫く經つと奥の居間からごぼごぼ力のない咳をしながら椽側傳ひに客間の方へ出て行つた。今にも自分呼びに来るかと思つて、俊子はあちあち話もしてゐられない程氣を揉んでゐたが、さう思つて待つてゐるといつまで經つても何の音沙汰もないので、彼女はほつとしながらも終にはひどく不安にな

つて來た。

幾度か躊躇した末、彼女は到頭じつとしてゐられなくなつて、こつそり足音を忍びながら客間の方へ様子を伺ひに出て行つた。そしてその椽側の隅へ立つてまるで猫のやうに聞き耳を立てながら客間の話聲を立聞きした。

間内では何か激しい争論でもやつてゐるらしく、荒々しい津崎の聲が際立つて洩れ聞えて來た。それに答へる母親の聲はまるで押伏せられてゐるやうに力がなく、漸次と窮地へ追ひ詰められてゆくさまが眼に見えるやうにありと伺はれた。それを聞いてゐると俊子はもう我慢が出来なくなつて、突如間内へ飛び込んで行つて、憎い津崎の喉元へ噛みついてやり度いほど氣が焦だつて來たが、どうにも手の下しやうがないので、その儘石像のやうに五體を竦めながら凝然と立ち竦んでゐた。

一時間ばかり經つと彼等は云ひたいだけの事を云ひ盡したと見えて、漸う歸り支度をしはじめた。俊子は柱の陰へ隠れてそつと彼等の後姿を見送つたが、無頼漢のやうな横柄な歩きさまをしてゆく彼等の後からしよんぼり俛首れな

がら随いてゆく母親の横顔をみると、彼女は情なさに胸が詰まつて思はず唇を噛みしめた。

彼等はやがて人を莫迦にしたやうな自動車の號笛を残して長家門を往來の方へ出て行つた。と同時に母親は玄關から急ぎ足に歸つて来て、椽側の處ではつたり俊子に行逢ふと突如腹立たしさうな聲で、

「俊子。一寸用があるから奥へ来てお呉れ。」と云つて、きつと俊子の眼の處を見据ゑた。その瞳の底には口惜しさうな涙が一杯に輝いてゐた。

俊子はおどおどしながらやがて黙つて母親の後に隨て行つた。茶の間では喜三郎と治子が何事が起つたと思つたのか、障子を細めに開けて怪訝さうに此方を覗いてゐた。

母親は奥の居間へ來ると俊子を筆筒の際へ坐らせて、自分で入口の紙襖をびしやりと閉てきつてしまつた。

二

母親は俊子から離れた火鉢の前へ坐つたまゝ、暫らくの間燃えるやうな眼つきをしてぢいつと俊子を睨みつけてゐた。その様子では何か激した言葉で突如彼女を頭ごなしに叱りつけでもしさうだつたが、それにしては餘りに興奮が激しすぎるのか、母親は唇を顫はせながら口も利けなかつた。唯大きく睜つた眼からは涙が睫毛に溢れてはらはらと止途もなく頬に流れた。

少時すると母親は袖口で頬を抑へながら、やつと途斷れとぎれに口をきつて、「私はお前のことに就いては、もう一切何にも云はない心算でゐたけど、今日と云ふ今日はもうとても我慢がしてゐられないから、云ふだけのことは云つてしまひます。お前を私の生みの娘だと思つてゐては恥かしくつて何も云へやしないけど、それかと云つて私は此の儘お前を許して置く譯にはいきません。こんな事をして放置つて置いた日には私までどんな目に逢はされるか分りやしない。」と自棄な語調で云つて、俊子に深い反省を促すやうな調子になりながら、

「お前も今度こそは自分といふものがよくお分りだらう。道に外れたことをすりやどんな恐ろしい報いが来るかといふこともお分りだらう。しかし今それが分つたんぢやもう遅い。お前は今自分の體がどんな恐ろしい處へ落ちてゐるか知つておいてかい？」

俊子は黙つて返事をしなかつた。返事をしようにもう返へす言葉がなかつたのである。

母親は唇を顫はせながら言葉を續けて、

「かう云つたら嘘だと思ふかも知れないけど、お前は今ほんとに死ぬより恐ろしい瀬戸際に立たされてゐるんだよ。お前の考へやうひとつでは明日にもお前は牢へ入らなけりやならないんだ。」かう云つて母親は怯えたやうな顔になりながら今津崎が云ひ残して行つた恐ろしい存念を彼女に話して聞かせた。

津崎は今日俊子に最後の會見をするために松倉へやつて來たのであつた。それを母親は俊子が可哀想と思ふ一心から、まだ沼津にゐるやうに云ひこしらへて逢はせまいと苦心した。薄々彼女の歸京を感じてゐた津崎はそれを聞

くと益々感情を害して、母親を散々に苦しめた。そして最後に隱囊から一通の書類を取出して眞蒼な顔色になりながら愈々手詰めの談判に懸つた。それは紛れもない告訴状だつた。此際もし毅と俊子とを引離すことが出来なければその告訴状を直様役に立たせると云ふのである。そしてその時の恐ろしい形相でみても、もうそれが唯の威嚇でないことは確だつた。

そこまで聞くと俊子はもう度を失つてぶるぶる肩を顫はした。いつの間にか唇の色までなくなして、彼女の眼には異様な輝きが見えてきた。

「若しそんな事になつたら、お前はどうする氣だい？私は今もうその時こそきつぱり覺悟を極めて、お父様へ申譯に立派に自害して死んでしまひます。いくら生きてゐやうと思つたつて、とても恥かしくつて生きてはゐられやしません。喜三郎の生先も氣に懸るけど、さうなつたらもうあの子の事なんか考へちやゐられない。」さう云ひながら言葉を結んで母親の眼には狂はしい光と一緒に動かすことの出来ぬ覺悟が閃いてゐた。そしてその儘ふつつり口を嚙んでしまつたが、その沈黙は百千の怒罵にもまさつて強く俊子の胸を刺し貫いた。

涙も出ぬ絶望に包まれた俊子の耳にはやがて又母親の啜泣くやうな訴へるやうな聲が聞えて來た。

「だけど私はもう過ぎ去つたことは何にも云ひません。今云ひ出せば自分が却て恥かしい思ひをしなけりやならない。お前のやうな不孝者を生んだのが不幸だと思つて、そりやもう疾うから斷念めてゐるんです。唯斷念められないのはお前の行末なんです。そんなことをしてゐてもし裁判所へ引出されて牢へでも入れられたらお前だつてさぞ辛からう。生てゐられない程恥かしい思ひもしなけりやなるまい。」と涙に聲を塞がれながらだから今迄のことはさりと思ひ切つて、此儘北海道へおいで。私は決して悪いことは云やあしない。北海道へ行つて當分の間親兄弟にも逢へなかつたら、お前にも私達の心がよく分るに違ひない。」

俊子はいつの間にか畳の上へ身を投げ伏して、激しく肩を波打たせながら聲

を立て、泣いてゐた。

「もう何にも考へることは要りやしません。お前が何と云つても私はお前を北海道へやらなけりや承知しない。此場になつて私の吩咐けに背くことは決して出来ません。」母親は斷乎とした決心を示して、それともこの儘のめのめ東京にゐて、お母さんに自害をさせてまで恥を曝して歩き度いと云ふのかい？」

俊子は嗚咽を嚙みしめながら小兒のやうにせぐり泣くばかりだつた。

母親はその様をじいつと見据えてゐたが、やがてまた聲の調子を落して、
「お前が今考へてゐることは皆間違つてゐるんです。到底出來ないことを出来るやうに思つてゐるんです。そんな馬鹿なことは今日限りすつかり思ひ切つてしまつて、私の云ふ通り北海道へおいで。東京さへ離れてゐりや決してお前の身の爲めにならないことはないんだ。一時は辛からうけど、そりやお前が自分で作つた苦しみなんだから仕方がない。それに治子も幸ひしつかりしてゐて呉れるし、あの子に預けて置けば私も安心してお前に別れてゐられるんだから……。」

母親はそれから長いことくどくどと愚痴を零すやうな聲で北海道行を勧めた。俊子もしまひには返事を迫られて、口先だけでも承諾の意を示さない譯にはいかなくなつた。

母親はそれを聞くと急に安心したやうに顔色を和けて、

「さう極ればもう一應治子にも相談して置かなければならないから。」と云ひながら直ぐに立ち上つて、茶の間の方へ出て行つた。

俊子は涙を拭きながらしよんぼり坐つてゐたが、たつた一人になつて考へ盡したいやうな突詰めた氣が頻りにするので、やがてこつそり母親の居間をぬけだして、二階座敷へ上つて行つた。そして八疊の小窓から霜枯れた高臺に續く雑木林の景色を眺めてゐると、いつか底知れぬ悲しみが犇々と胸を引包んで、矢も楯も耐らない程毅に逢ひ度くなつて來た。逢つてあゝも云はう、かうも云はう、あの懐かしい胸に身を投げて悲しい運命を思ふ様泣いて訴へよう。さう思ふと彼女はもう眼の前が眞暗になつてゆくやうて前後の考へも殆んど一瞬間に没却してしまつた。

俊子はやがて身繕ひをして、足音を忍びながらそつと階段を降りた。そして玄關へ出ると、有り合ふ下駄を突懸けて人眼に觸れないやうに後を見返りみかへり長家門を出て行つた。

四

俊子はその足で程遠からぬ杉浦の邸の方へ歩いて行つた。いくら思ひ詰めても、さすがにその玄關へ立つて毅を呼び出すほど大膽な氣にはなれないので、萬一出會す事もあらうかといふ果敢ない僥倖を空頼みに彼の女は幾度となくその宏壯な鐵門の前を行つたり來たりした。邸内は森閑と静まり返つてゐて、馬車廻しの陰に點つたアーク燈の光だけが明るく、黄昏と力を争ひながらほのかな樹立の闇を照らしてゐるばかりで、なかからは人の出て來る氣勢さへしない。しまひには往來の人が胡散臭さうな眼つきをしながら彼女の顔を覗き込むので、到頭我慢が出來なくなつて、妙にいぢけた悲しさに唆られながら彼女は何處へ行く目的もなく、漸々と麴町の大通の方へ歩いて行つた。

山の手とは云ひながらそこには輝かしい店明りと賑やかな人足が右左に流れてゐた。師走ももう茲四五日の内に押塞まつた今日此頃なので軒を運ねた店々では態と人目を惹やうに商品を堆く店先へ積並べてゐる處もあれば又賣出しの紅提灯に景氣をつけてゐる家もある。そのなかを出換はりに呑吐されてゆく人達の頬にも何處となく春を急ぐ氣忙しさが浮いてゐた。

俊子は消魂しい電車の號鈴に追はれながらその賑はひのなかをしよんぼりさまよひ歩いてゐた。どうかして毅に逢い度い一心でもう胸は一杯に込み上げゐた。そのうちに彼女はふと一策を案じてとある取りつけの小間物屋の店へ入つて行つた。そして要りもしないピンをひとつ買ったあとで何氣ない風を装ひながらその若い番頭に頼んで杉浦家へ電話をかけて毅を電話口へ呼び出して貰つた。

番頭が丁寧な聲で杉浦家を呼んでゐる間俊子は又とない思ひ付きを今更のやうに喜びながらそわそわして待つてゐた。毅は幸ひ家にゐたとみえて十分ばかり経つと番頭は受話器を置きながら、

「お出になりました。」と云つて俊子の方を振向いた。

俊子は代り合つて電話の前へ立つた。その時俊子の唇は人目に立つほどはげしく顫へてゐた。

「誰方です、誰方です？」と受話器に響いて來る毅の聲はいつになく妙に尖つてゐた。

「私です。私ですよ。」俊子は慌たゞしくそれに答へたがさすがに店先なので人の思惑も氣になつてあの是非お眼にかゝつてお話ししたい事が御座いますんですが、いづお眼に懸れませう。」と改まつた聲でやつと此れだけ云つた。毅は俊子と知ると急に聲の調子を落して、何やら早口で續けさまにくどくど云ひかけたが嚇とした俊子の耳には何の意味だかまるで分らなかつた。たゞ「明日ちや可けませんか？」と云ふ言葉だけがはつきり聞えた。

「いゝえ、今夜中には是非お眼に懸らなけりやならない用事なんて御座いますの。明日になつてはもう手遅れになるかも知れませんか。」俊子は先の心を惹くやうに一生涯懸命に云つた。そして長く話してゐては毅が出澁るかも知れない

ので、赤坂見附の上で待つて居りますから、どうか是非直ぐに被來つて下さいませ
しな。」と云つて先の返答も待たずに電話を切つてしまつた。そしてその儘眞
紅な顔をしながら番頭へ禮を云つて、逃げるやうに小走りに店を出て行いた。
大通りからも來た道を赤坂見附の方へ引返してゆく時、俊子は杉浦の邸か
ら小半丁も行過ぎた、とある軒燈の間に背の高い一人の青年が急ぎ足にずんず
ん歩いて行く後姿を見付け出した。ソフト帽を前のめりに被つて、外套も着ず
に肩を聳かして行く姿は正しく毅だつた。

俊子は嬉しさに我を忘れて突如小走りにその後を追ひ掛けて行つた。

五

後から追ひ縋る足音にそれと氣付いたのか先へ行く青年はやがてとある軒
燈の下でふと此方を振顧つた。

「毅様毅様ぢやなくつて？」俊子は息を弾ませながら突如小聲で呼び懸けたが、
それを聞くと青年はその儘其處へ立止つて帽子の庇の蔭からじいつと此方を

瞻りながら、

「俊子さん？」と低く沈んだ聲で答へた。

「まあ、ほんとに相済みません。御用のある處をお呼び出して……。」と俊子
はやつと毅の傍へ走り寄つて、是非ね今夜のうちに眼に懸つて御相談して置
かなければならない事が出来ましたもんですから……。」と云つて、顔色を讀む
やうにをづをづ彼の顔を覗き込んだ。

「何んです？又津崎の方から何んか云つて來てもしたんですか？毅はさう云
ひながらまたそろそろ歩き出したが、その顔にも、その語調にも、いつもとはまる
で違つた疎々しさがあつた。

「貴方何うか遊ばしたの？大層お顔色が悪う御座いますのねえ。」俊子はそれ
と氣付くと自分のことは打忘れて心配さうに訊いたが毅は唯かすかに首を振
つて、

「いゝえ、何うもしやしません。そんな事よりも貴女の方の話しを早く聞かし
て下さい。」と低い、膠もない聲で呟くやうに答へた。

「え、今すつかりお話し致しますわ。でもこんな人通りのある處ぢや誰に見付かるか分りませんから、もつと寂しい通りへ参りませうよ。」と、俊子は少し急ぎ足になつて、赤阪見附の方へそわそわ歩いて行つた。そして見附上から華族女學校の前を山王臺の方へ降りる阪の闇路へ入ると、つツと毅の傍へ寄り添つてきて、それとなく彼の手を探りながら、思ひ出したやうに、

「ねえ毅様。それよりも房子様は何う遊ばして？自殺をしようとなすつたつて、ほんとの事なんて御座いますか？」と聲を弾ませて訊いた。

毅は少時の間何とも口をきかなかつたが、やがてふと我れに返つたやうに、

「え、ほんとに毒を飲んだんです。」と言葉少なに答へた。

「まあ、それで病院へ御入院になつたさうですが、その後の御容體は何うなんて御座いますの？」

「いや、何うもかうもありやしない、今朝曉方に到頭死んでしまひましたよ。」毅の聲は絶望したやうに重苦しく沈んで來た。

「えッ、お亡りになつたんですつて？まあ、何うしませう、私、ちつとも存じませ

んで……。」俊子は愕えたやうに口を噤んだ。

その咄嗟、俊子の眼の前には眞闇な夜の闇の底から斷末魔の苦悶に喘いでゐる房子の面貌がすうつと幻になつて浮んで來た。あの人も到頭敢なく死んでしまつたのかと思ふと、我れながら妙な空怖ろしくなつて來て、譯もない感情とともに體ぢうの血が冷えきつてしまふやうな戰慄が襲ひかゝつて來た。心のうちでは少くとも自分達ふたりがその恐ろしい自殺の近因を作つたのだと承認してゐながら、明らさまにさうと斷定するのがひどく恐ろしくて、彼女はいろいろに辯解の方法を考へながら漸次と深い苦惱の底へ落ちて行つた。終ひには口をきくのさへ怖くなつて、肩を竦めながらひたと毅の傍へ體を摺り寄せ

て歩いていつた。
毅はその儘傍に俊子がゐるのも氣付かないやうに黙り込んで歩いてゐたが、ふとした拍子に耐らなくなつたやうに深い嘆息を吐いて、

「考へてみれば房子も可哀さうな女ですねえ。」と誰れに云ふともなくひそひそ呟いた。

「……併し房子の身になつてみれば、此の場合自殺をするより外には仕方がなかつたてせう。何しろ腹のなかの兒は一日一日に生長して来るし戀人には捨てられるし、僕は僕であつた素氣ない態度を見せる、何うにもかうにも自分の體の處置をつける方法がなかつたに違ひないんです。それも自業自得だといつてしまへばそれまでだが、あんな氣性の女であつてみれば全く可愛想にも思はれません。僕には房子が毒藥の壘を口に當てるまでの恐ろしい苦悶がはつきり考へられます。房子だつて決して莫迦ぢやないんだから、死ぬと覺悟を極めるまでには何んなに苦悶したことでせう。今になつて考へてみると、あんに不節制な女でも何處かに自覺した自意識の強い處があつた。人生と云ふものに對して何んかしら疑惑を持つてゐて、その爲めに態と現實的な放埒な生活のなかへ體を投げ出してゐるやうな處があつた。」教はまざまざと房子の姿を眼の前に瞞めてゐるやうな調子で云ひ續けた。

俊子はいろいろな感情や思考を心のなかで纏れさせながら聞いてゐたが、
「でもほんとに初めつから覺悟を極めて自殺をなすつたんでせうか。こんな事を申しちや何んですけど、私にはそんな強い方のやうには何うしても思はれませんわ。」

「そりや無論覺悟の上ですとも。てなけりやいくら房子だつて生命をかけてまで芝居をしますまい。」教は熱心に云つて、そりや僕へ宛てた遺書を見てもすぐ分ります。僕を恨み、僕を罵りつて居る文言なんかは實に深刻を極めてゐるんです。多少は精神に異状を來たしてゐるらしい點もあるが、併し懸りつけの醫者の藥局から硫酸を盗み出して來る手段なんか實に冷靜なもんです。僕は決してあの女の自殺を精神錯亂だとは思はない。最後までちやんと自分を意識して死んだんです。」

俊子はそのには何とも答へなかつた。氷のやうな恐ろしさが斷えず心に襲ひかゝつて、自分も恨まれた一人だと思ふと、房子の怨恨が此れから一生の間自分の首筋に纏はりついて離れないやうな氣が頻にして來るのであつた。

二人はその儘眞暗な道を右左へ曲つて知らず識らずのうちに山王臺へ上る薄氣味の悪い坂路へ懸つてゐた。樹立は兩方から黒々と掩ひ被さつて冷たい夜風が土の匂ひと一緒に何處からともなくすうつと湧上つて来る。人ツ子ひとりゐない静けさのなかには街燈の光が憎えたやうに心細げに瞬いてゐるばかりである。

毅はひやりとしたやうに體をふるはせて、

「あゝ、思ひ出してもぞつとする。僕はあの物凄いの房子の死顔だけは一生忘れることが出来ずまい。硫酸で爛れた唇はまるで黒い石榴のやうになつてゐました。あの肥つた頬が蠟石のやうな色に瘦せ削けてゐました。それへ曉方の薄明りが暗く射しかゝつてゐたんです。あゝ、何うしてあの顔を忘れることが出来よう。僕だつて一度は確にあの唇に接吻したことがあるんだ。一度は確にあの女を戀したことがあるんだ。それを僕は到頭あんな無残なしかたで殺ろしてしまつた。自分で手を下さないまでも、毒藥の壘を房子の手に握らせたのは確に僕なんです。」毅は一時に心の平靜を失つて、狂氣したやうに

せいせい息を引きながらその儘坂の中途へ立止まつてしまつた。

俊子はそれを見ると突如毅の胸へ轟と抱きついて、ふるふる體を慄はしながら、

「あら、貴方。そんな恐い事を仰有つちや厭です。もう房子様のことを仰有るのは止して下さいまし。」と一生懸命な泣き聲になつて云つた。

七

毅はその儘我にもなく啜り泣きしだして、連絡もないことをくどくどと口走つてゐたが、思ふさま搔口説てしまふと漸う正氣に返つて、憎えたやうに體を辣めてゐる俊子の肩をじつと抱緊めながら、

「もう止しませう。いくら考へたつて房子が生き返つて来る譯ぢやなし、それにあの女が何なつたつて僕と貴女の間には何んの關係もないんですからねえ。僕達は今あの女の死を嘆いてゐるやうな場合ぢやないんです。それよりもつともつと重大な事が僕達の眼の前に迫つて來てゐるんです。ひよつとかする

と僕達も房子のやうな恐ろしい運命を追はなけりやならないかも知れない場合なんです。彼は空洞な聲で云ひながら又俊子の頬に唇を寄せて、

「ねえ、俊子さん。早く貴女の方の話しを聞かして下さい。それを聞いた上で、次第に依つちや僕も今夜のうちに決心をきめてしまはなければならぬから……。」と言って、彼は俊子の肩を抱いた儘又阪の上の方へとぼとぼと登つて行つた。俊子は涙に唇を塞がれて少時の間は口もきけなかつたが、やがて泣きながら、

「あの、私、二三日うちに北海道の方へ遣られてしまうんで御座いますの。」とやつと此れだけ云つた。

「え、北海道へ？」 毅は怪しむやうに訊き返したが、やがて失望を聲に現はして、僕もそんなことだらうと思つてゐました。もう此うなつた上は貴女の家でもさうするより外には仕方がないんでせう。實は僕も矢張りそれと同じ宣告を受けてゐるんです。今度の房子の死が家としてはもう最後の打撃で、僕は今日の午後に伯父や兄から斷然たる處分をされてしまつたんです。僕は茲十日以

内に日本を去らなければならぬんです。もう何んなに腕いたつて反抗したつて、今度こそ到底駄目なんです。それに津崎の方からも手紙で告訴狀の寫しを送つて來てゐますし、今度こそどんなことをしたつてもう遁れる道はないんです。」と云つて悲しげに聲を呑みながら、だから僕としては此の儘いつそ思ひ切つてあなたともお別れをするか、それとも……。」

「厭です、厭です。今になつてそんなことを仰有つちや、私、厭ですわ。」俊子は激しくせき上げながら、私、どんな事があつても此儘お別れするは厭です。そんなお別れするくらゐならひと思ひに死んでしまひます。」

「だからそれなら今のうちにすつかり覺悟を極めてしまはなければ可けないんです。此の儘別れ別れになるのがほんとに厭だつたら、僕達は最後の瞬間まで一緒になつてゐるだけの覺悟を極めて置かなけりやなりません。最後の瞬間まで一緒になつてゐるだけ……。」毅は聲に力を籠めて俊子の胸を刺るやうに強く云つた。俊子の耳にはその言葉が聞えたのか聞えないのか、彼女は突如毅の胸へ顔を埋めて、

「そんな事を仰有らずにどうか一生のお願ひですから、この儘私を何處か遠い處へ連れて行つて下さいまし。この儘私と一緒に遁げて下さいまし。さうして若し人に見付かつたらその時こそ私は何んな事をしてゝも死んでしまひます。死んでしまひます。」と狂氣のやうに泣きながらせがんで、漸次と激しい歇斯的亞的の發作に陥つて行つた。

八

毅はそれから長いこと途方に暮れて、暗闇のなかにほのめく俊子の白い横顔を瞞めながら自分も聲を呑んで頻りに泣いてゐたが、しまひには考へれば考へるほど自分でも何うしていいか分らなくなつて、俊子の襟脚の處へ唇を押し當てたまゝ深い絶望に胸を噛み裂かれてゐた。

そのうちに何處かてふとかすかに佩劍の音がして、密行巡査が坂下の方から登つて来るやうな氣勢がしたので、彼は慌てゝ俊子を引立てゝこつそり樹立の間を離れた。そしてそのもの音とは反對の方の道へ出て祠の前から暗い小徑

を永田町の方へ降りた。

暗い屋敷町を彼此二時間餘りも行つたり來たりした末、彼等はやつと最後の決心を極めることが出來た。後は何うならうと此儘家出をして譬へ僅かな日數でも自分達に十分満足の出來るやうな日を送らう、若し不幸にして發見されたらその時こそ思ひ切つて潔くどうなりと處決してしまはう、それが二人の間に最後の保障を置く堅い決心であつた。そして明朝十一時にそれぞれ支度を整へて、態と人目に立たないやうに品川の停車場で落合ふ手筈まで極めて、二人はやがて赤阪見附の上で涙ながらに寂しく袂を別つた。

俊子はそれから後もすぐには家へ歸らずに、たつたひとりてしよんぼり其處邊をさまよひ歩いてゐた。寒い夜風は砂塵と一緒に裾を吹き廻して、一歩ごとに骨を刺すやうな寒氣が犇々と腹の底まで浸み渡つて來た。彼女は唯一心になつて、明日の首尾やらそれから先の頼りない運命などを思ひ煩ひながらそのなかを當てもなく歩いてゐた。

とある角を曲ると、彼女の眼の前には通ひ馴れた一條の寂しい屋敷町が見え

て来た。そこから小一丁も行くとも右側に津崎の家があるので、彼女はふと我れに返つて、何がなしに悸乎としながら突如後へ引返さうとすると、その時後から明るい前燈の光がさつと闇を劈いて一臺の自動車に矢のやうに彼女の眼の前を駛り過ぎて行つた。その途端に、すぐ向側の生垣の陰から、

「姉さん。」と云ふ呼聲が聞えて、誰れかばたばたと駆け出して来て、いきなり彼女の腕へ纏りついた。とみると、それは喜三郎だつた。いつにない唯ならぬ様子をして彼女の腕を攫んだその手もわなわなと打顫へてゐる。

「まあ喜三郎さん。」俊子はその咄嗟驚きに胸を塞がれて、此様な處で何をしてゐるの？」

「何をしてゐるつて、姉さん……喜三郎は勃發して来る感情に喘ぎながら、早く家へ歸つて下さい。早く家へ歸つて下さい。」と續けさまに唸りながら叫んだが、その聲の底には安心と嬉しさにほつとしたやうな調子があつた。そして彼女の腕を無理に引立てるやうに引張りながら泣き聲になつて、

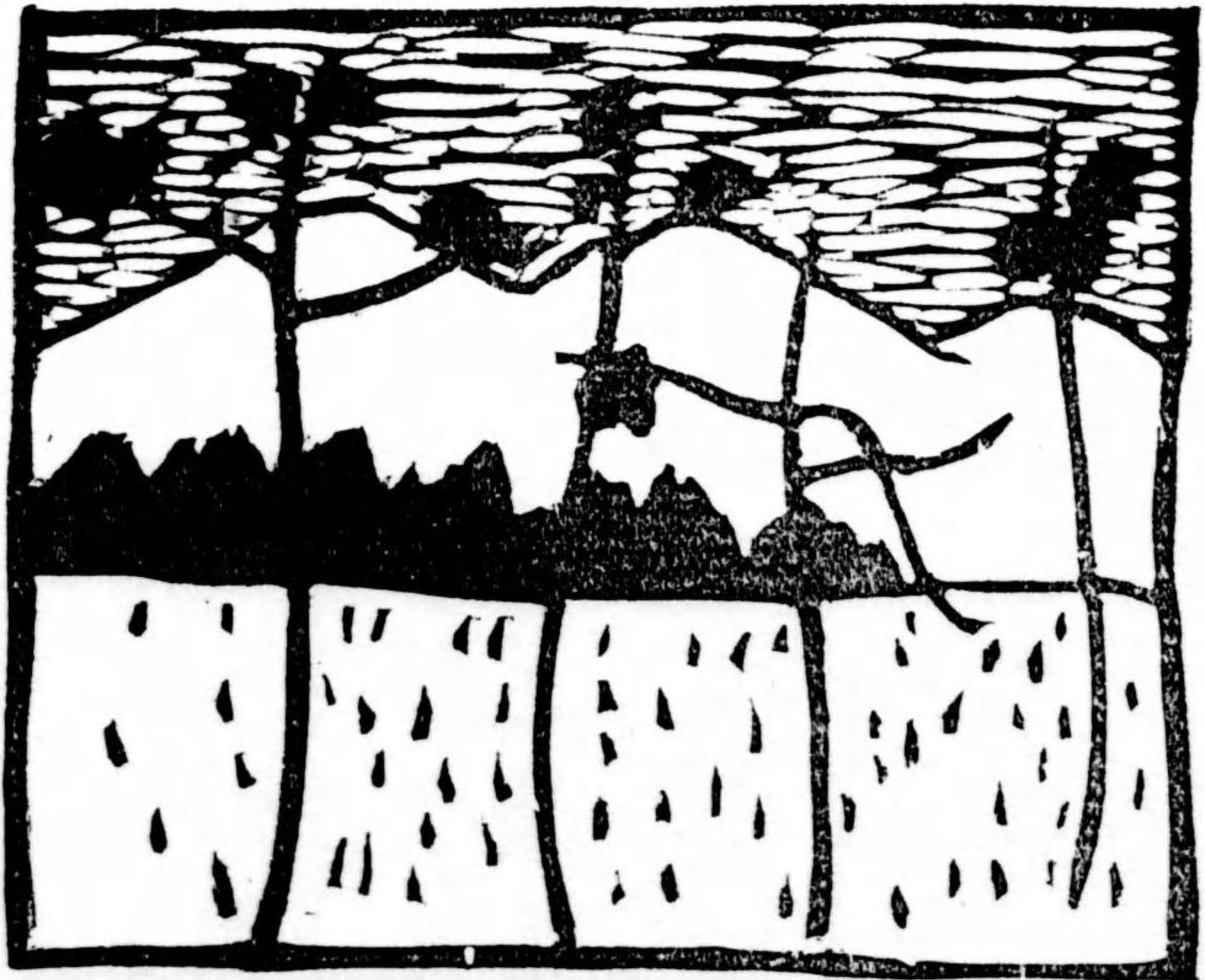
「さあ姉さん。直ぐに一緒に歸りませうよ。姉さんが急に見えなくなつちま

つたんで、もう家ぢう大騒ぎをしてゐるんです。僕も何うしようかと思つて、家にゐても気が氣ぢやないから先刻から方々捜して歩いたんだけど、何處にもゐないんですもの……」

俊子はさうした恨みがましい言葉を聞くと、姉思ひのこの弟がしよんぼり自分の行方を捜し歩いてゐた姿が眼にみえるやうで、急に胸が迫つて来た。そして一言も口をきかず、弟に腕を執られたまゝ心のなかくては啜泣きに泣きながら家の方へ連れられて行つた。

家へ歸つてみると、その時は家ぢう上を下へ返して大騒ぎの真最中だつた。俊子の行方がその頃になつても更に知れないので、心當りの處へは電話がかけられる、搜索の人は八方へ走る、母親や治子は座に居耐れないほど心配して家ぢうをうろろうろしてゐた……俊子はその晩遅くまで途方に暮れたやうな母親の前へ引据ゑられて、慈愛に充ちた激しい言葉で散々に叱られたり、訓されたりした。明日の別れを思ふと、俊子にはその言葉が一々胸を刺るやうに悲しく響いた。

旅
路



その晩俊子は曉方まで殆んどまんぢりともしなかつた。明日は愈この生
みの家を出奔して、戀しい殺とたつた二人で何處とも知れず姿を隠してしま
うのかと思ふと、今更のやうに悲しさ、懐かしさが胸一杯に溢れて來た。そして萬
一の事が起つた場合にはもう今宵ひと夜が父母の家の見納めになるのだと思
ふと、二十餘年の間、雨につけ風につけ種々さまざまな懐かしい思出を繋いで
た此の家が別れ難く思はれて、俊子は冷たい臥床のなかで身悶えしながら涙
の限り泣きに泣いた。そして時折こつそり枕から頭を擡げてすぐ隣に寝た母
親の寝顔を差覗くと、彼女は耐らなくなつて、突如その胸もとへ縋りついて今
切ない思ひを打明けてしまひ度いほど胸が迫上げて來た。そしてさうした深
い悲しみのためにいつか前後も打忘れて、彼女はおちおち家出の方策を思ひ
ぐらす餘裕さへ持たなかつた。

翌朝まだ暗いうちから臥床を忍び出て二階の居間へ上つて、それとなくこつ

そり信玄袋の用意などをしてゐると、やがて母親も喜三郎もいつになく早く起
きて來て、まるで影身に添ふやうに俊子の傍へ隨いて廻つた。殊に母親は彼女
の出奔を見ぬいて、もゐるやうに一刻の間も彼女から眼を離さず、一舉一動の
末々まで注意してゐた。

そのうちに朝飯は済む、時間は容赦もなく經つて、八時を打つたかと思ふと直
ぐに九時になつてしまつた。俊子は着のみ着の儘でもいゝから一刻も早く家
人の隙を伺つてそつと家を出さうと焦つたが、いつも誰か一人は必ず自分
の周圍にくつついてゐるので、到頭いゝ機會を見出すことさへ出來なかつた。

十時を過ぎると、さすがに俊子も耐り兼ねて、そつと信玄袋を玄關の次の間へ
持ち出して、自分は二階へ上つたり茶の間へ行つたり、そわそわ落着かない風を
見せてゐたが、母親は到頭眼敏とくその信玄袋を見付けだして、片手にぶら下げ
ながら茶の間へやつて來て、

「俊子、お前はこんなものを持つて何處へ行くんだい？」と云ひながら何も彼も
讀んでしまつたやうな鋭い眼つきでじいつと俊子の顔を睨んだ。

俊子は返す言葉もなくて睨り上げながら低く俛首れてしまった。

「お前は今日からもう一切外へ出てはなりません。何んな用事があつても決して外へは出さないからその心算でおいで。母親はきつぱりした聲で云つて、俊子はその儘自分の居間へ連れて行つた。

俊子は夕方迄そこへ監禁されてゐた。今頃は毅が停車場でしよんぼり自分の來るのを待ちあぐねてゐることだらうと思ふと、晝餐などは一粒も喉へは通らなかつた。そして冷たい畳の上へ突俯したまゝ、聲を忍んで泣いてゐたが、唯焦々とした悲しさが胸を責めるばかりでもう何うすることも出来なかつた。約束を違へたので毅からも何か音沙汰があつたに違ひないが、それも家の人に抑へられて俊子の耳へは通じなかつた。

晩になると麻布の叔父が治子と一緒にやつて來て、奥の間で母親と何か長いこと相談しあつてゐた。そしてそれが濟むと叔父はたつた一人て俊子の傍へやつて來て、噛んでくゝめるやうな言葉で北海道行きの手配りを話して聞かせた。

俊子は愈ゝその翌晩の夜行で東京を發たなければならなかつた。治子は歸

札の目を無理に繰上げて一緒に伴をして行くし、それに叔父も道中を氣遣ふ餘りに忙しい用事を差繰つて札幌まで送つて行くことになつた。そして沼津から歸つて來た荷物がまだ幸ひ開けずにあるので、それはその儘彼地へ轉送される、そして總ての支度は明日の夕方までにすつかり整へられる事に取極められたのであつた。

もう萬事はそれで了つてしまつた。家出をすることは扱置き戀しい毅に逢ふことさへも出來ずにこの儘遠い北國の果へ送られてしまふのかと思ふと、俊子は叔父の前も憚らず聲を振絞つて泣いた。

二

俊子が愈ゝ東京を發つ日は朝からじとじと、雲が斷絶なしに降りしきつて、低く垂れ下つた灰色の雲間から時折さつと吹落として來る風は針のやうな寒氣を含んでゐた。旅支度はすつかり明るいうちに整へられて、汽車便で託送さ

れる大行李や、旅行袋は停車場へ運ばれる途中で入用なこまごました手廻りのものは夫れぞれ信玄袋と小鞆に纏められて、今にも出立の出来るやうに玄關側の小部屋へ置き並べられた。

俊子はかうまで支度が運んでもまだ家出のことが思ひ切れなくて、連も駄目とは知りつゝも隙を伺つてはこつそり玄關先へ忍び出て見たりした。そして始終電話口や郵便の聲に氣を配つて、今にも毅から何とか音沙汰がありはしまいかとそればかり一心になつて待ちあぐねてゐたが、午後も過ぎ、黄昏も過ぎ、到頭夜に入つても彼からは何の便りもなかつた。もう愈この儘今夜發つことさへも彼に知られずに、遠い北海道の果へ送られてしまはなければならぬのかと思ふと、俊子は死よりも一層強い絶望を覺えずにはゐられなかつた。そして一昨夜の飽かぬ逢瀬を最後に、今日から先は毅にも何日又逢へるか、ともするともう此が一生の別離になるのではあるまいかと思ふと、今迄心に残つてゐた一縷の望みの綱さへ切れ果て、彼女の心には最後の果敢ない光明も悉く消え去つてしまつた。

夕餐の時には叔父も治子もすつかり旅支度を整へて來合はせたので、一家の人達は奥の茶の間へ集まつて心ばかりの別宴を張つた。いづれも涙含んだやうな顔をして、送る人も送られる人も云ひ度いことは胸に溢れてゐながら妙に相互に思惑を計り兼ねるやうな眼ばかり見合はせてゐた。叔父は態と皆の氣を引立てようとして、時々軽い笑談などを交へながら聲高に笑つてみせたが、その聲は却て云ひ知れぬ寂しさを四邊に響かせるばかりで、皆の唇に浮ぶ微笑みは漸次と冷たく憂ひに沈んでいつた。

中でも喜三郎は今度の理由の分らぬ姉の北海道行きがひどく不平で折に觸れてはそれとなく母親に恨みがましい事を訴へてゐたが、その時も亦心細さうな口振りでさまざまな啣ち言を云ひ出して、さんざ母親や叔父を困らせた。俊子はこの弟にも永の別れを告げるのかと思ふと、彼の唇から出る一言一句がしみじみと胸に應へて、到頭人前も恥ずに泣き崩れてしまつた。今迄涙を抑へてゐた治子もそれに引入れられて泣く、喜三郎も泣く、しまひにはそれを叱りつ訓しつ制してゐた母親まで、雙眼に一杯涙を湛へて、いつか言葉も低く途斷れ

勝ちになつてしまつた。

「さあ、もうえい、もうえい。目出度い別れに涙は禁物だ。何もこれが生別れになると云ふんぢやなし、北海道邊まで出懸けるのが何故そんなに悲しいのだ。はゝゝゝ。殊に俊子は體もすつかり丈夫になつたし、北海道まで雪景色を見物に行くのだと思へばほんとに贅澤な旅ぢやないか。そんなに泣いて別れて貰つちや後に残るものが氣懸りでならん。少しはお母様のことも考へてもう少し氣をしつかり持つて呉れにや困るぢやないか。」さう云ふ叔父も唇では笑つてゐながら眼には一杯涙を溜めてゐた。

いつまで泣いてゐても別れが盡きないので九時を打つと車の用意をさせて愈上野の停車場へ向ふことになつた。皆一緒に揃つて玄關へ出た時送り出すお藤もお初も、

「どうかまあ御機嫌よう。」と云つた限り袖口で顔を掩つてゐた。

戶外へ出てみると、爰はいつの間にか雪に變つて、もうそこらの小砂利を敷いた路の面は眞白になつてゐた。俊子は深く下ろされた幌のながで激しく啼り

上げながらその儘住み馴れた我家の長家門を出て行つた。

三

停車場へ来てみると、發車までには大分時間があるので、彼等はひとまづ待合室へ入つて氣を落着けることにした。大晦日を眼の前に控へてゐる故か、停車場のなかまで何處となくざわめいてゐて、それぞれ行先に所用を持つたやうな數多い旅客達は聲高な話聲を立てながら、ろろろ彼方此方に打群てゐた。そして天井に響く足駄の響や、手荷物を運搬してゆく臺車の音は汽笛の叫びに鈍れながら断えず人を壓するやうな鈍いどよみをつくつてゐる。

彼等は待合室へ入つても坐るベンチがないので、なるべく人氣の薄い隅の方へいつてひとかたまりになつて立てゐた。四邊の氣忙わしい響に唆られて皆の顔色もいくらか生々して來て、今になつて初めて思ひ出す忘れものや家の方の跡始末のことなどをこまごまと話し合つてゐたが、そのなかでも俊子と喜三郎だけは悲しげに口を噤んで、窓硝子の彼方にぼんやり滲んでみえる町の灯を

じつと見入つてゐた。

愈々時間が迫つて改札口が開くと、彼等は旅客のあひだに揉まれながらそろそろプラットホームの方へ出て出た。氷を含んだやうな夜風は容赦もなく横様に吹きつけて、大粒の雪が上屋の下までもさらさらといきほひよく吹き込んで来る。プラットホームの片側や列車の屋根にはもう眞つ白に積つてゐた。

旅立つ三人はその儘列車へ乗込んで、赤帽に取らせて置いた狭い座席へ窮屈さうに目白鳥押しした腰を下ろした。そして赤帽が、

「こんなに込んで居りましても仙臺から先はもうがらりと空きますから。」と追従らしく云ひ捨て、行つてしまふと、叔父は直ぐに後の窓を開けてそこから窓下に集まつた母親や喜三郎の方へ首を差延べながら、

「何の彼のと云ふとるうちにもう愈々名残になりましたな。どうかまあ嫂さんも餘り氣を使はんやうにして、お壯健でゐて下さい。」

「は有難う。」母親は打濕つた聲になつて、どうか俊子の方の事は呉れくもお

願ひして置きますから……。

「そりやもう決して御心配なく。かうして私が随いて行けば此れより大丈夫な事はないのぢやから。は、は、は。」叔父は態とらしく勢ひのいゝ聲で笑つた。それを聞くと、叔父の傍から重なり合つて顔を出してゐた俊子も治子も涙含んだ眼でもう一度母親や喜三郎の方をみた。そして治子は、

「喜三郎さん。今度姉さんがお歸りなさる時には是非札幌迄迎へに被來いな。ね、きつとですよ。私樂しみにして待つてますからね。」

「え有難う。それでなくつても姉さんがずつと長くゐるやうだつたら、春の休暇にはきつと札幌へ行きます。幸ひ學校も卒業になるし……。」

「さうさう。來春はもう卒業ですわねえ。そんなら猶都合がいゝわ。ねえ、伯母様。是非どうぞ喜三郎さんを彼地へお寄越しなすつて下さいましな。北海道を見物なすつて置くのも、後てきつと何かの利益になりますわ。」

母親は寂しく笑ひながら黙つて合點いた。

やがて入口の方で冴えた發車の鈴が鳴つた。俊子はそれを聞くと我慢がし

きれなくなつて、手帛で顔を掩ひながら、途斷れとぎれに、
「ではお母様。行つて参ります。當分はもうお眼に懸かれませんかどうぞ
お體をお大事に……」

「あ有難う。お前も體だけは要心してね、今度逢ふ時にはどうか昔の俊子に生
れ變つて歸つて来てお呉れ。私やそればかり楽しみにして待つてゐるから。
母親も耐らなくなつて涙聲で云つた。

「は……ぢや喜三郎さん。左様ならどうか貴方も勉強してね。俊子はせぐ
り来る涙に遮られてもうその先言葉を續けることが出来なかつた。そして手
帛の上から泣き濡れた眼だけ出して、悲しみに蒼ざめた弟と最後の別離にじい
つと顔を見合はせた。

その時突然改札口の方からばたばたと慌だしい靴音が聞えて二人の紳士が
後先になりながら大急ぎでブラットホームへ駆け込んで来た。先に立つた一
人は間もなく見送人の陰へ隠れて列車へ乗込んでしまつたらしかつたが、後の
紳士は突然立止まつて、まごまごしながらそこの車室を覗いて廻つた。

「お、津崎が。」叔父は小聲で叫んだが、其途端に魂消しい汽笛が一聲長く呻いた
ので其聲は窓の外に立つた人達の耳へは入らなかつた。

「左様なら。」

「左様なら御機嫌よう。」といふ悲しい別れの言葉と咽び泣の聲に送られて、列
車は徐々と動き出した。

四

その翌日、仙臺と盛岡の間で暫らくの間蒼空を見たが、中山を過ぎて尻内の附
近へ下るとまたいつともなく暗澹とした灰色の雲が低く垂れ下つて来て、粉の
やうな雪がちらちらと落として来た。それと同時に地を掩つた積雪の深さも
眼に立つやうに深くなつて来て、線路の兩側には幾層となく斷層をなした雪堤
が雪圍ひの斷え間たえまに續いた。そして眼路の限りは一望の雪原で、波のや
うな起伏を示す荒寥とした地平線の彼方には鼠色に曇つた暗い大空と雪に包
まれた連山がかすかに見えてゐる。眞直に轟々と生えた針葉樹の蔭に村童達

がまるまると外套のやうなものを着込みながら櫓を挽いてゆく姿なども初めてみる叔父や俊子の眼にはひどく珍らしかつた。そして列車が荒廢した高原を思はせるやうな野邊地附近の放牧地へ入る頃になると、もう四邊は少しづつ薄開くなつてきて、何とも云ひやうのない寂しい黄昏が車窓に迫つてきた。

青森へ着いたのはそれから二時間ばかりの後だつた。俊子は困憊し盡した體を車窓に凭せ懸けてうとうと假睡んでゐたが、ふと治子に呼び醒まされて眼を睜くと、列車はいつの間にかほの暗い電燈の光に照らされたプラットフォームへきて横着けになつてゐた。車室のなかの乗客は大方そゝくさ起ち上つて、車窓の外で騒々しい噪音に紛れながら、

「青森。青森。」といふ訛のある驛夫達の聲が聞えてゐる。

「さあ、俊子さん。もう降りるんですよ。青森へ着きましたから。」治子はかう云ひながら旅馴れた様子で頻りに下車の支度をしてゐる。それを聞くと俊子も漸う我れに返つて慌て、起ち上つた。

列車を出ると、今迄ステイームの温氣に蒸されてゐた體には吹き曝らしのブ

ラットフオームを掠めてゆく夜風がまるで針で刺すやうな鋭い寒氣を滲ませる。停車場の構内も、町端れの灯影に續く原野も一様な眞白な積雪に埋もれて、積みあげた雪の山の間を駛り違ふ機關車の煙さへその儘凍てついてしまふのはあるまいかと思はれるばかりの寒氣である。そして降る脚は見えずに粉のやうな雪は時折さらさらと人々の袖といはず脊なかと云はず眞白に吹きつけて來た。

「お、寒む。青森からこんなぢや先が思ひ遣られるな。」叔父は外套の襟に頸を埋めながら治子に云ひ懸けた。

「ほゝゝゝ。父様寒う御座いませう。私なんかもう馴れつ子になつて居りますからよう御座いますけど、それでも汽船の乗降りには随分閉口致しますわ。」と治子は元氣よく云つて、今度は俊子の方を振り顧りながら、

「まあ、俊子さん。貴女ぶるぶる慄へて被居るぢやないの。少しぐらゐ見つともなくてもその毛布を着て被居いよ。それでないと風邪をひきますわ。」と云つて、赤帽から厚い毛布を取つて、俊子の後から懸けてやつた。そして態と面白

さうに笑ひながら、

「ほい、ほい。すつかり北海道式になつてしまひましたわねえ。彼地では學校の生徒でも、奥様でも皆さういふ恰好をして歩くのよ。」

俊子は齒の根も合はないやうな寒氣に慄へ乍ら黙つて毛布の下で身を縮めた。

三人はやがて騒々しい下駄の音に追はれながらブリツヂを渡つて、宿引や車夫の打群たなかを船車連絡の待合室へ入つて行つた。

五

津輕海峽を渡る連絡船は午後の十一時に出帆するので、九時を打つと彼等はそろそろ身仕度をして、赤帽に導かれながら待合室を出た。治子も俊子も船暈ひを氣遣つて態と食事を執らなかつたので、待ち合はす長い時間の間、叔父は寒さ凌ぎに治子に酌をさせて久し振りてちびちび酒を飲つた。その利きめて彼は待合室を出る頃には稍酔つて、いつにない浮々した元氣のいゝ笑ひ聲を立て

てゐた。

線路端の眞闇な雪道を二丁ほどゆくと、やがて解の出る海沿ひの待合所へ出た。高い上屋のかゝつた吹曝らしにはぼやけた電燈が薄暗く點つて、そのベンチには十人にも充たない旅客が寒さに體を竦めながらぼんやり船を待つてゐた。彼等はその突端にある別に硝子戸で圍つた一二等の待合へ行つて、他には客もないのでがらんとした一室を獨占しながら温かいストーヴにあたつた。掘割のすぐ外は眞闇な海で、護岸に打寄せる波の音が絶えずひたひたと聞えて来る。遠い沖合には船體は見せずに、唯輝かしい燈火の光だけを舷窓から隠見させながら連絡船が碇泊してゐる。粉雪が時折渦巻くのか、一列に連るその光はぼうつと淡く滲んで、何處からともなく遠い風の音が海上を流れてゆく。「あれが連絡船だな。なかなか大きな船ぢやないか。」叔父は暫らくするとやつと氣付いて云つた。

「え、なんでも二千噸ぢかくある船ださうで御座いますから、大抵な暴風に逢つても大丈夫で御座いませうねえ。」治子は父の顔をみながら親子らしいしみみ

りした調子で云つた。

「うむ、これぐらゐな僅な航程にあんな大きな船は勿體ないくらゐなものだ。はい、はい。」と笑つて、その儘暗い海上へ眼をさまよはせてゐたが、やがて、しかし今夜はこりや少し暴れさうだな。あの風の工合ぢや灣の外へ出たら横波を被るかも知れん。」

「さうて御座いませうか。厭ですわねえ。」治子はそつと俊子と顔を見合せた。そのうちに別な列車が着いたのか、旅客が三々五々待合所へ流れ込んで来て、ひつそりしてゐた四邊が急に騒々しくなつた。彼等のゐる一二等の室へも寒さうな恰好をした連中が四五人どやどやと入つて来た。いづれも北國の人達と見えて、訛のある言葉で遠慮會釋もなく饒舌りたてるので、彼等はそれに壓されていつともなく口を噤んでしまつた。

俊子は毛布のなかへ頭を埋めて、遣る瀬なさうに沖の燈火を眺めてゐたが聞き馴ぬ言葉を耳にするにつけてももう遠く東京から離れ去つた事が思ひ遣られて、熱い涙は知らず識らずのうちに頬へ流れた。そして今更のやうに戀し

い毅の面影を心で食つてゐると、その時解へ渡る浮橋の際にふと見覚えのある人影を認めた。それは脊の高い洋服姿の紳士で、眞黒な外套ですつかり體を引包んで、厚い襟巻をした上からは深々と頭巾を被つたまゝ、しよんぼり柱の陰へ突立つてゐる。紅い信號燈の光が薄暗く射しかゝつてゐるばかりなので、無論誰れとも見分けがつかなかつたが、その人の眼は不思議にも頭巾の陰から絶えず此方を注視してゐるやうに見えた。俊子は何となく薄氣味が悪くなつてその儘他の旅客の陰へ身をひいたが、暫くすると何かなしにふとそれが昨夜上野の停車場で津崎と一緒に遅れ馳せに慌たゞしく駆けつけたあの紳士ではあるまいかといふことに氣がついた。と、彼女の心のなかではその紳士と津崎との間に何んかしら關係が出来て、ひよつとしたら津崎の意を受けて態々自分達の後を躡けてゐるのではあるまいかと云ふやうな疑ひが頻りに湧いて来た。彼女はそれと同時に名状することの出来ぬ不安を覺えて、恐ろしい凶事が自分達の行途に立塞がつてゐるやうなそれとない豫覺に戦かすにはゐられなかつた。間もなく解の小蒸氣は汽笛を鳴らしながら掘割のなかへ入つて来た。繫船

のごたごたが濟むとやがて彼等はひとかたまりになつて危げな足許を探りさぐりやつとそれへ乗り移つたが、その時には不思議な紳士の姿は何處へ消えたのかもうそいらには影も形もみえなかつた。

六

正十二時に錨を巻いた連絡船は降り罩めた雪のなかを徐々に速力を高めながら北へ向つて進航してゆく。今のいまゝて南京珠を聯ねた様に點々と瞬いてゐた青森の町の灯も漸次と遠く影薄れて終には名残を惜しむやうに最後まで輝いてゐたアーク燈の光さへいつかしら全く濃い夜の闇の底に葬られてしまつた。それと同時に舷を打つ波浪は咽ぶやうな哀切な音を響かせて、水を空とも分かぬ一樣の暗闇が船の周圍を悉く引包んでしまつた。

俊子は広い船室のまはりを取廻す腰掛けの上にくづをれて頭から毛布のなかへ包まりながら舷窓の彼方に遠く消えてゆく内地の最後の港に別れを惜しんでゐたが、總てが悉く闇に掩はれてしまふと、さすがに耐らなくなつて、手帛

を顔に押し當てながら聲を呑んで嘔り泣きしはじめた。もうこれが故郷の見納めといふやうな突詰めた悲しみは譯もなく胸一杯に込み上げて来て、先刻待合所で見た不思議な紳士のことも、その時に覺えた不安も悉く打忘れて、唯只管に耐へ難い悲嘆の底に沈んでしまつた。

さうした悲しみのなかにも先づ第一に思ひ起されるのは毅の上であつた。今頃は自分がこんな遠い旅路に送られてしまつたことも露知らずに何を思ひ何を憂へてゐることだらう。取紛れて忘れてゐたが、さう云へば昨日は房子の傷ましい屍を埋める葬式の日であつた。俊子にはその名を思ひ出してさへ涙の種は盡きなかつた。

俊子は最早思ひ返すことの出来ぬ深い絶望に沈みながら東京に残してきた母親を思ひ弟を思つた。抑へ切れぬ涙は留途なく頬に流れて、ともすると嗚咽が喰ひ緊つた齒を洩れやうとした。そしてもうそれ等の人達から斷り離され、捨てられて長い月日の間再び都會の光を見ることも出来ずに吹雪のなかで寂しく暮らさなければならぬのかと思ふと死にまさる苦惱が次々と彼女の胸

を壓して来た。

「おい、俊子。そこは冷えるから此方へ下りて来んか。」叔父は坐るやうになつた座席へ治子と差向ひに座を占めながらかう呼び懸けたが返事がないので、起ち上つて来てそつと俊子の背から覗き込みながら、また何かよくよ思ひ出したるな、もう何も考へることはありやせんぢやないか。それより此方へ来て一緒に面白く話さう。こんな晩には何うかして氣を紛らかさんと悲しい方へばかり考へが惹かれてゆくからなあ。」と同情の溢れた聲で彼女の耳へ囁いた。彼女もその聲を聞くと急に人懐かしくなつて、そのまゝ涙を拭きながら腰掛けてから下りて治子の隣へ行つて座を占めた。

叔父はやがて信玄袋のなかから正宗の塚詰めを取出して、手酌でちびちび飲りながら、

「こんな晩にこの海峡を渡るのはまことに寂しいもんだなあ。治子は此の前には獨り旅だつたからさぞ辛かつたらう。」

治子は寂しげに笑つてゐたが俊子の姿をみると我れにもなく涙含んで、

「ほんとに厭で御座いますわねえ。此の船に乗るともう暗い穴のなかへ入つていくやうな氣が致しますんですもの。俊子さんは初めてだからそれでなくつてもどんなに寂しくお思ひなさるか分りませんわねえ。」

「はい。そのかはり今度東京へ歸る時分には此の船が有難くて耐らなくなるさ。」叔父は可笑しくもなさうに肩を揺りあげて笑つたが、やがて急に話題を變へて、併しあの波の音を聞くと私も昔を思ひ出すなあ。」としんみり昔を顧みるやうな聲になつて、彼はまだ海軍にゐた時代の思ひ出を面白可笑しく次々と物語つて聞かせた。

舷に碎ける波の音は漸次と高くなつて、それと一緒に船體は薄氣味悪く上下にゆらりゆらりと揺れてきた。

七

二聲ばかりの鈍い汽笛に呼び醒まされてふと我に返ると、船は漸次と船脚を落として函館の港へ近づいてゆくらしかつた。四邊はまだ暗い夜に包まれて

ゐて、何處とも知れぬ中空にたつた一つ燈臺の火が粉雪にかきくれながら寂しく瞬いてゐる。

俊子は船暈に心勞に困憊し盡して叔父の傍に突俯したまゝ、殆んど身動きもしなかつた。ともすると激しく突上げてくる胸が息塞るほど苦しくて、じい眼を瞑ぶつてゐると穴の底へでも吸ひ込まれてゆくやうな眩暈が斷絶なしに襲ひかゝつて来る。そして冷たい生汗がいつの間にか脊筋に氣味悪く傳つてゐた。

船が愈々棧橋へ横着けになつても彼女は起ち上る元氣がなかつた。治子の方も同じく船暈に耐力もなくなつてゐるので、叔父は彼等が少しでも氣分の直るまでその儘船中に残つてゐるよりほかには仕様がなかつた。そしてボーイに頼んで寶丹を取寄せたり、布毛で足を温めてやつたりいろいろに介抱の手を盡くした。

一時間ばかり経つと、やつと二人とも少しづつ落着いて來たので、更めて赤帽に荷物を託して、彼等は甲板から舷梯を傳つて棧橋へ下りた。四邊はもうそろ

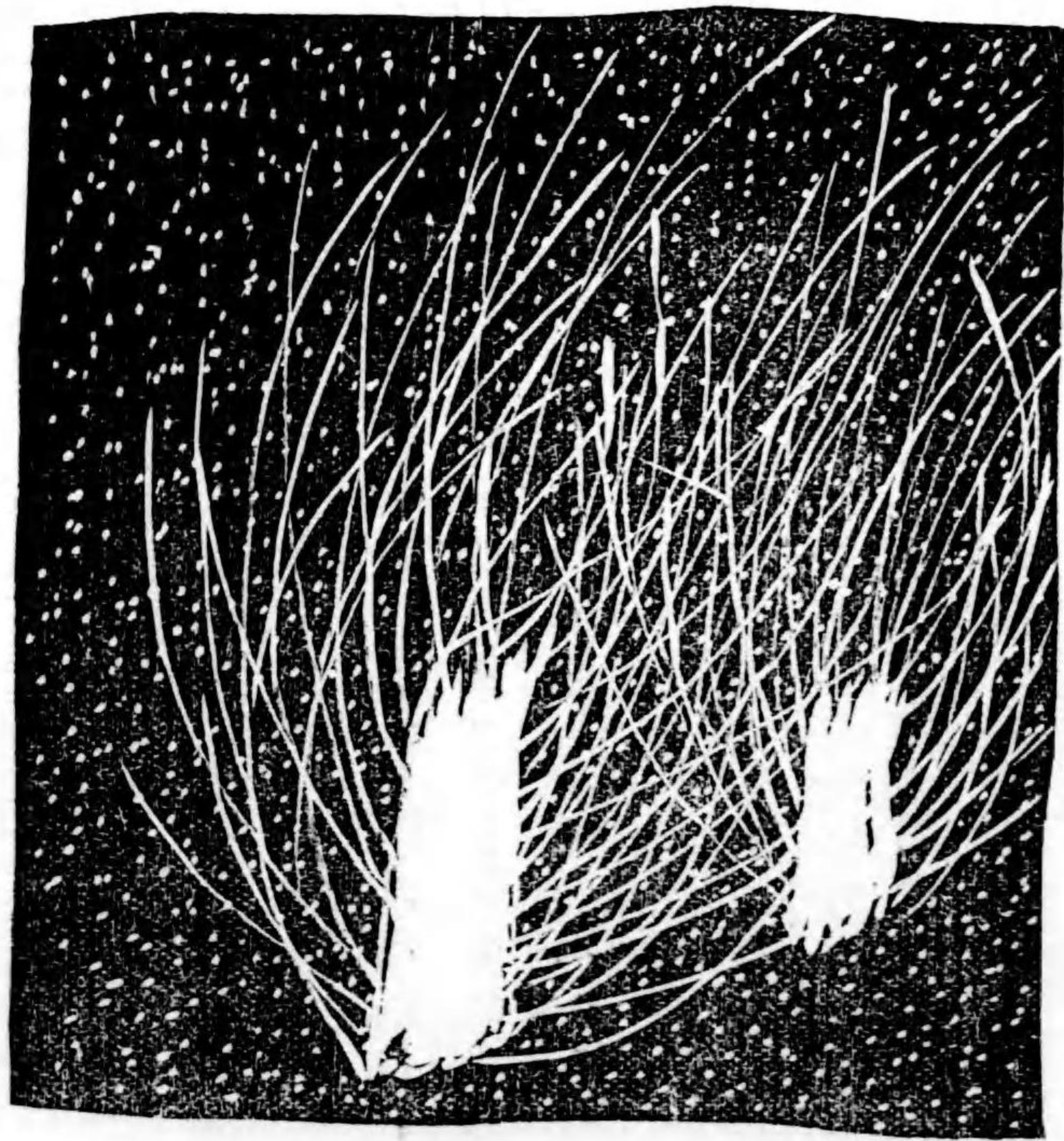
そろ薄明るく夜が明けて、荒寥とした斷崖や港の灯の數々が降りしきる雪のなかに朦朧と隠見してゐた。そして眞白な積雪に掩はれた棧橋は鴉のやうな人影を乗せたまゝ、眞直に町の方へ延びて、その先には宿引の車夫の提灯がちらちら彼方此方に行違つてゐる。寒氣はひく息と一緒に唇へ凍てついて來た。

「さあ、愈々北海道へ着いたな。」叔父は張り詰めたやうな聲で云つて、俊子と治子の手を執つてやりながら雪の上をそろそろ町の方へ歩いて行つた。俊子は握られた温かい叔父の手先から親身の情がしみじみと通つて來るやうな心強さを覺えて、一心に氣を張りながら歩いたが、棧橋を渡り盡して漸うのことと船車聯絡の待合所へ辿り着くと、急にまた苦しくなつて、その儘その疊敷きの處へ耐力もなく突つ伏してしまつた。

「こら、俊子。何うした、又苦しくなつたのか？叔父は慌て、訊いたが、彼女は力なげに肩を慄はすばかりで、返事さへ出來なかつた。

「困るなあ。今からさう弱り込んで、此の先何うするのだ。今日の夕方にはもう札幌へ着くのだから、それまで何うにかしてしつかりしとつて呉れ。」

夜の雪吹



「ほんとにねえ、俊子さん。もう少しの處だから我慢して下さいな。」治子も自分の苦しいのを抑へて甲斐々々しく云つた。

俊子は黙つて息を呑んでゐたが、やがて消え入るやうな聲で、

「もうどうぞ打棄つて置いて下さいまし。私この儘死んでしまひ度う御座います。」心勞て妙に歇斯的利的になつた彼女は、到頭駄々を捏ねるやうにこんなことまで云ひ出した。そして彼女自身ではその時眞實このまゝ息が絶えてしまつても決して惜しくはないと思ふほど突詰めた苦悶に身も心も包み盡されてゐたのであつた。

叔父はそれから長い休憩時間の間治子と二人していろいろに慰めたり、介抱したりしてみたが、とても此の儘朝の列車に乗つて札幌まで揺られ續けてゆくには彼女が堪へられさうもないので、到頭旅程を變更して、その日一日函館で静養することにした。そして海岸に近い町にある小綺麗な旅館へ案内して貰つて、降る雪の間に群飛ぶ海鳥の姿を眺めながら終日俊子の介抱に空しい時を費してしまつた。

夕方までは俊子の體の工合が發てるか何うか危ぶまれたが夜に入ると何うやら稍氣分も勝れて來たらしく口數も漸次ときくやうになつたので彼等は急に支度をしなほしてその晩の急行で再び札幌へ向けて旅を續けることに極めた。こんな見も知らぬ土地でうかうかしてゐて萬一どつと病みつかれてもしたらそれこそ一大事であるしそれよりも一刻も早く札幌へ着いて治子の家へ落着いた上で十分静養した方が幾ら心丈夫だか知れぬといふ考へから叔父は強つて先を急ぐことにしたのであつた。

俊子は何となく氣が進まなくて其儘ストーヴの快よい溫氣に罩められた旅館の二階で一晩ゆつくり寝たかつたが叔父が急ぎ立てる様を見るとさうも云ひ出し兼ねて澁々起ち上つた。そして朝の時よりも餘程足許もしつかりして來たので彼女は叔父と治子に助けられながら兩側に掻き分けられた雪道を停車場へ行つた。

彼等が函館を發つたのはその晩の七時過ぎであつた。釧路まで直通する唯一とつ急行列車なので晝の連絡船で着いた旅客もまざつて可成りな混雜を呈してゐた。殊に明日はもう大晦日だと云ふので自分の村や漁場へ歸るやうな人達の姿が多かつた。いづれも丸々と毛布を引被つて頭巾で顔を包んでゐるその様子がいかにも寒國らしい氣持を起させた。

彼等は二等室の隅へひとならびに席を取つてなるべく氣を浮かせるやうな話をしながら笑ひさゝめいてゐた。鳥渡話聲が途切れると云ひ知れぬ寂しさが皆の胸を襲ふのでそれを引立たせるのは一方ならぬ骨折りだつた。叔父は函館で新たに買はせたポケット、ウキスキイを網棚から下ろして嘗めるやうに少しづつ味はひながらいろいろな話を先々と話題を追つて話しつゝけた。そして自分ひとりで強ひてにこにこ面白さうな笑顔はみせてゐたがその甲斐もなく何か暗い影でも射し添つて來るやうに深い憂愁が漸次と皆の眼の底に澱んで來た。

車窓から眺めると四邊は黑白も分かぬ眞闇がりて雪に掩はれた大地の起伏

だけがほのかにそれと見分けられる。そして外は恐ろしい吹雪になつたと見えて、時々車窓の隙間から細かい雪片と一緒に凄じい風の唸き聲が遠く聞えて来る。俊子は毛布のなかへ蹲まりながら身も世もあられぬやうな絶望と不安に責られて、唯空洞な耳で叔父の聲をぼんやり聞いてゐた。

長萬部を過ぎる頃になると流石に叔父もまる二晩寝ぬ旅疲れと、昨夜からの介抱づかれてそろそろ睡りを催して来た。ステイームのほつかりした温氣と酒の酔は薄く頬を染て、やがて彼は車窓へ當てがつた空氣枕へ頭を埋めながらさも快よさうにすやすや寢息をたてはじめた。跡に残つた治子はなるだけ話の途断れないやうにして寂しさを紛らかさうと焦つたが、そのうちに自分も頻りに欠伸を洩らしていつの間にか座席の背へ肩を凭せ懸けたまゝ、耐力もなくこくりこくりと居眠りをやりだした。

俊子はたつた一人になると耐らなくなつて、また涙含みながらしよんぼり物思ひに沈んだ。何うにかして眠り度いと思つて信玄袋へ頬を押當てながら一心に眼を瞑つてはみたが、萬感が胸を押し潰すやうに迫つて来て涙ばかりがし

としと袋の布を濡ほした。で、その儘わぎたなく眠り轉けた他の乗客の顔を眺めまはしながらぼんやり途方に暮れてゐると、その時一等室へ通ふ硝子戸の面へ異様な人影がすうつと映つてくるのをふつと認めた。それは紛れもない昨夜の不思議な紳士で、青森の待合所でみた時と寸分違はない風恰好をしてゐる。彼女は、その刹那頭の上で何かと爆發でもしたやうにぎくりとして、心臓がそのまゝ冷めたくなつてしまふやうな激しい衝動に打たれた。

二

俊子は急にその不思議な紳士から眼を逸らして何うされることかと恐ろしさにとぶるぶる慄へてゐたが、その儘何の物音も聞えないので少時すると又こわごわ瞳を据ゑてそつとそつちを偷み見た。不思議な紳士はまだ硝子戸の彼方に石像のやうに突立つてゐた。そして眼深かに被ぶつた頭巾の下からじつと俊子の方を凝視してゐたが、彼女がそつちを見たのを知ると何と思つたか少し頭をあげて頬から下を明らさまに電燈の光のなかへ現はしながらそつと手招

ぎした。

俊子はその怪しげな様子を見ると又ぞつとしたが、その途端に頭巾の陰に輝く二つの瞳をみた。と、彼女は何かなしに愕えたやうなかなすかな呻めき聲を放つて、突如座席からふらふらと起ち上つた。そして、

「あ、毅様。」と聲は立てずに腹のなかに叫びながら硝子戸の方へ踏めいて行つた。

硝子戸の彼方に突立つた不思議な紳士は正しく毅だつた。何うしてこんな思懸けもない處へ來てゐるのか、總ては謎のやうな祕密として彼の眞黒な外套の下へ包み隠されてゐるのであつた。

俊子は硝子戸の處まで行くと自分の眼を疑ふやうにもう一度彼の顔をきつと見た。幾度見ても紛れもない毅なので、彼女は夢の様な氣持ちになりながら、その儘開かれた硝子戸の間から倒れるやうに隣の一等室へ踏け込んだ。そして狂氣したやうな嗄れ聲で、

「毅様。毅様。」と叫びながら彼の胸の處へしつかりと抱き附いた。

「そんな聲を出しちや可けない。静かに静かに。」毅は彼女の唇を手で押塞ぐやうにしなから座席の隅の處へ後退りしていつて、そこへぐつたりと腰を降ろした。

「まあ貴方。何うして此様な處まで被來つたの？ 私まるで夢のやうな氣がして……」俊子は涙聲になつて毅の傍へ坐りながら餘りの嬉しさと不思議さに呆然と彼の顔を覗めた。

「いや、何うしてでもないんです。何かのことは後ですつかり話しますから……」と、俊子の耳へ囁いて、彼は反對の座席に眠り倒れてゐるたつた一人の乗客に氣を兼ねながら、兎に角此の次の停車場で下りて下さい。何處でも構はないから停つた處で降りて下さい。」

俊子はそれを聞くと何とも知れぬ不安に襲はれながら、

「まあ降りるんですの？」と慄へ聲で呟いて毅の顔ををぶをぶ見上げた。

過ぐる夜赤阪見附で別れた時とは一層面窶れがして、襟巻に包まれた彼の顔はまるで死人のやうに蒼ざめてゐた。眼の底にも名状することの出來ぬ不思議

議な輝きがあつて、一眼見ても唯ならぬ決意をもつた形相に變つてゐた。

俊子は言葉も出ぬやうな恐れに打たれて、その儘狂ほしい動きかたをする彼の眼の處をまじまじ瞞めてゐたが、彼はもどかしさうに肩を聳やかして、

「僕はもう上野を出る時から機會を狙つてゐたんです。何うにかして僕が同じ汽車に乗つてゐることを知らせたいと思つて、随分いろいろに苦心をしてみただけで、何しろ端にゐる人に氣付かれさうで危くつて仕様がなにもんだから到頭こんな處まで来てしまつたんです。今は皆も眠つてゐるし實にいゝ機會だからどうぞ此の次の停車場で降りて下さい。降りて呉れるでせう？、さうして一時間でも二時間でもいゝからたつた二人きりになりませう。」

さう云はれると俊子にはもう他に返事の仕様がなかつた。じいつと胸の底まで滲透つてゆくやうな彼の瞳で見据ゑられると彼女は、何ひとつ拒む力がなくなつて、彼の命ずるがまゝに、こつそり自分の座席へ毛布や信玄袋を取りに歸つた。

三

列車は間もなく停車場へ着いた。僅か五分か六分の停車時間の間に、薄氷を渡るやうな危険を冒さうと云ふので、俊子はまるで氣が浮釣つたやうになつてゐた。幸ひ叔父も治子も前後不覺に寢入つてゐるし、同じ車室の旅客達も耐力のない夢路を追つてゐるので、彼女は毛布だけはやつと取上げたが、信玄袋を取るには何うしても治子の體へ觸らなければならぬので、いつそ思ひ捨て、その儘ぶるぶる慄へる足許を踏みしめながら消え入るやうな思ひで列車を下りた。

毅はもうちやんと下車して、改札口の彼方へ出て、ほの暗い洋燈の光を浴びながら眞黒な鴉のやうな姿をしてきつと此方を瞻つてゐた。俊子は帯の間から紙入を取り出して改札の驛員へ切符を示すと、驛員は眠さうな聲で、

「札幌ですな。」と一言云つたぎり、鉄を入れて呉れた。その何気ない様子さへをどをどした俊子には何となく後見られるやうに恐ろしくて、彼女は毅の傍へ

歩み寄ると突如。

「ねえ、貴方。早く此處を出ませうよ。」と小聲で促した。

人氣のないがらんとした停車場を出ようとすると、戶外は見るも凄じい吹雪で煙のやうな粉雪が面を振向けることも出来ないやうにさつさつと吹つけて来た。空から降るのと、地から捲き上るのと一緒になつて濛々と渦巻きながら夜の闇の底を彼方此方にほの白く奔騰してゐる。そして建物の外は屋根から落ちる雪が根雪の上へ堆かく積上つてゐるので、何處から足を踏みだしたのかそれさへ當がつかなくつた。

毅も俊子もその凄じい光景をみると、もう呆氣にとられてしまつた。何うにかしようと思つても見も知らぬ土地なので一向に見當はつかず、唯無上に氣が熱だつばかりだつた。そして揭示板に書いてある文字で、やつと其地が黒松内と云ふ處であるのを知つたばかりなので、停車場を出たら何處に何ういふ町があるのかそれさへまるで分らず、殆んど途方に暮れてしよんぼりそこに突立つてゐるより外には仕方がなかつた。

そのうちに今まで乗つて来た列車は叔父や治子の安らかな夢を乗せたまま、寂しい汽笛を吹き鳴らしながら停車場を出て行つた。その轟響が吹雪のなかを漸次と遠のいてゆくのを聞いてゐると、俊子は堪らなくなつて啜泣をしながら毅の胸へ轟と絶りついた。

そこへ一人の驛員が郵便脚夫と一緒に大聲で話しながら出て来たので、毅は突如それを呼び留めて其附近に宿屋の有無を訊ねた。と、郵便脚夫は何と思つたか、叮嚀に辭儀をして、

「此一つ先の町に一軒御座りますが、えらく穢ねえて、旦那方にはお泊りになれねえかも知れねえですが……。」と頭巾のなかへら云つた。

毅はそれを聞くとほつとして、

「いや、何んな家でも構はんが、まだ起きてゐるだらうか。」と危ぶむやうな聲で訊き返した。

「はあ、まだもう一つ上りが来ますから起きて居りますとも。そこでよけりや私が連れていつて上げますべ。」と云ひながらその郵便脚夫はついと吹雪のな

かへ出て、

「う、えらく凍れるなあ。」と呟きながら先へ立つて案内して呉れた。
二人はそれに勢ひを得てその後から踏みきながら雪の上を歩いて行つた。

四

二人はしつかり手を握り合ひながら凄まじい吹雪のなかを面も振らず歩いて行つた。山の突角から颯と吹き廻して来る風は腰から下へ雪を吹きつけて、まるで水の流れを渡つてゐるやうにともすると足を取られさうになつた。そして停車場を離れるに従つて、何處が何うなつてゐるのだから四邊は全く暗澹とした一色の薄闇に閉ざされて、直ぐ先へ歩いてゆく郵便脚夫の姿さへ折々は雪のなかに見失つてしまふことがあつた。

郵便脚夫はやがて四五軒ほど建ち續いたとある低い家並の前へ來懸ると、そのなかで硝子戸からかすかな灯影の滲み出た一軒の家の門口へ歩み寄り、その大戸をことごとく叩いた。と中からは女の聲が聞えて、手荒な音を立てなが

四五二

四五三

ら戸を開ける氣勢がした。吹溜りが重く押しかゝつてゐる上に下の方はもう凍りついてゐるので、戸はなかなか女ひとりの力では云ふことを聞かないらしかつたが、それでもやつと細めに開くと、そこからは頬の紅い逞しい顔つきの女がそつと顔を出して、

「まあ、仙さん。此の吹雪に今頃歸るのかい？」さう云ふ口許からは眞白な息がすうつと見えた。

「う、俺あ明日壽都の局まで行かなくちやならねえて、今夜は御厄介になりますべ。はい、はい。」と郵便脚夫は呑気に笑つて、それよりもお客様二人案内して來たゞが……。と云つて今度は袴と寄添つて軒下に佇んでゐる二人の方を振顧りながら、

「さあ、此處で御座ります。お入りなせませまし。」と質朴らしい笑顔を見せた。

二人は我慢しきれないやうにぶるぶる慄へながら細めに開けられたその戸の間から體を斜にしてなかへ入つた。最近に建てたものと見えて木口はまだ新しかつたが、それでも恐ろしく粗末な家だつた。併し今の彼等には家の美醜

などを見てゐる餘裕はなくて、唯自分達を入れて呉れる屋根のあつたことが此上もなく嬉しかつた。

彼等は頭から鷺のやうに眞白く降懸つた雪を拂ひ落して案内されるまゝにぎしぎし軋む廊下を奥の座敷へ入つて行つた。通された室は六疊ばかりの小部屋で、床の間もなければ押入れもないがらんとした處だつた。それでも壁には新聞の繪附録らしい額が懸けてあつて、隅の方には小さなストーヴが亞鉛張りの下敷の上に据ゑてあつた。そして天井から吊り下げた五分心の洋燈は石油が悪いと見えて時折ぶすぶす音をたてながら薄暗く四邊の壁を照してゐた。薄い木綿の座蒲團を敷いて對向ひに坐つた時彼等は何と云ふことなしに黙つてじいつと顔を見合はせた。手足はもとより兩方の頬までが寒さに凍て、まるで感覺を失つてゐた。それが少しでも温まつて來ないうちは二人とも聲さへ立てることが出來ないやうに思はれた。

女はやがて大きな十能にぶすぶす燻ぶる薪の燃えさしを盛つてやつて來た。そして夫をストーヴへ入て、四寸角程もある新しい大薪を容赦もなく押込でし

まうと今度はやつと彼等の方を向いて愛想氣のない挨拶をしながら、

「もう遅いですが何かお支度でもしますのか？」と訊いた。

「いや、もう何にも要らん。唯温かくしといつて呉れさへすりやそれでいい。それから酒があつたら熱くして持つて來て呉れ。」毅は俊子の方をみながら棒のやうな聲で云つた。

女は怪訝さうに二人の様子を見返りながら出て行つた。

五

ストーヴはやがてしゆうラツと云ふ異様な物音をたてながら嚇々と燃え出した。それと一緒にほつかりした温氣は漸次と間内に擴がつて來て、火口の處へ寄添つて坐つた二人の頬は少時するとやつと少しづつ紅く熱つてきた。

毅は女の持つて來た粗末な膳を俊子の側へ据ゑて肴がはりに並べてある鯛の干ものや、鯛には手もつけずに唯酒ばかり不味さうにぐびぐび啜りながら一心になつて話し續けてゐた。

「……房子の葬式が済んだのはあの日の夕方でした。僕は齋場で式だけ済ましたら直にその儘家へ歸る心算でゐたんですけど、房子のお母様が是非墓地まで来て呉れと云つて聞かないもんだから、到頭棺の後に隨いて墓地まで行きました。空は漸次眞闇になつて來る、もうその頃には雪がそろそろ積りだしたんで、あの暗い谷中の森へ入つてゆく時の心持は何とも云へませんでした。墓地にはもう深い穴が掘つてありました。骨になつた房子は小さな柩のなかへ入れられて、永久にその穴の底へ葬られてしまつたんです。僕は濕れた土地を取つて穴のなかへ投げ込みました。坊主達は薄闇いなかでひそひそ經を誦んでゐます。僕はもう我慢がしきれなくなつて、その儘こつそり墓地を逃げだしました。」と云つて、毅は薄く涙含みながらじつと俛首れてゐる俊子の横顔を瞷めた。

俊子はいつの間にか下唇を噛んで泣いてゐた。

「それから直に上野の山下へ出て、貴女の家へもう一遍自働電話をかけてみました。その時にはあの婆やが出て來て、あの晩貴女が愈々東京を發つといふこ

とを初めて聞いたんです。僕はそれから何うしようかと思つて、眞暗な公園の中を歩き廻りながら散々考へました。小さな白い柩や坊主の經を誦む聲はまだ僕の心の底に痛いほど鮮かに残つてゐます。僕は何とも云へない悲壯な氣持になつて、到頭貴女の跡を追ふ決心を極めました。もう何うせ仕方がないんだ。あと一週間も経たないうちに僕は日本を去らなければならぬ。今更貴女に別れてそんな遠い外國なんかへ行つたつて何になる。房子のことを考へると僕は女と云ふものが恐くなりました。僕は貴女さへ自分のものにしてゐりやそれていゝ、僕はもうそんな意氣地のない氣になつてしまつたんです。僕にはその時強い意志などといふものはまるでありませんでした。唯引摺られるやうに貴女の跡を追ふ氣になつてしまつたんです。」と云つて絶望的な顔色になりながら、

「それで家へ歸ると直ぐこつそり支度をして、旅行免狀を頼んで置いた外務省の友人の家へ行くと云つて、その儘家を出てしまつたんです。そしてまだ時間が早いので、銀座のカップフィーで母と兄へ宛てた長い手紙を書いて、それを出し

てから上野の停車場へ行つたんです。と丁度停車場の入口の處でばつたり津崎さんに逢ひました。無論口はきゝませんでしたが、あの人には僕の行先は聞かなくても分つてゐる筈です。何しろ時間が迫つてゐるので、僕はあの人のお思惑などを考へてゐる餘裕がなかつたもんですからその儘大急ぎで汽車に乗つちまひました。」

六

「……汽車に乗つてからももう気が氣ぢやなかつたんです。あゝして津崎さんに見付かつた以上は何か非常手段にでも訴へて途中で取押へられてしまやあしまいかといふ不安と、何うにかして僕が同じ汽車に乗つてゐることを貴女に知らせたいといふ焦悶しさで、僕はおちおち眠ることも出来なかつたんです。そしてやつと此様な遠くへ來て僕は到頭貴女とたつた二人つきりになることが出来たんです。」

俊子は頻りに啜り泣いてゐたが毅の言葉が切れるやつと顔を擡げて、

「私 さうとはちつとも知らなかつたもんですから、貴方のお姿をお見懸けしてゐながら、津崎の廻し者か何んかぢやあるまいかと思つて、却つて隠れて居りましたんです。まさか貴方が私の後を追つ驅けてこんな處まで來て下さうとは夢にも考へやあ致しませんでしたからねえ。」と云つて今更のやうに毅の顔をまじまじ瞷めながらも先刻ふつと貴方のお顔を見た時にはほんとに嬉しう御座いましたわ。ほんとに夢ぢやないかと思ひましたもの。」

毅はそれを聞くと窶れきつた顔に微笑みを浮かべて、その儘ひと處に眼を据ゑながら考へ込んでゐたが、やがてまた暗い顔つきになつて、

「併し、もう斯うなつた以上は、僕は短銃を手に握つたと同じことなんです。唯此先運命がどう云ふ道を執つて僕達を最後の到達點へ連れてゆくか、それが問題なんです。僕達は出來る丈反抗してみ、それで可ければもう黙つて運命に服従してしまはなければならぬ。」と自分でもその言葉に戦いてゐるやうな調子で云つた。

俊子にはさう云ふ毅の顔がひどく恐ろしく見えて來た。そしてその言葉と

一緒に告訴状を握つてゐる津崎の顔や、警察へ出て搜索願を書いてゐる叔父の顔などが一瞬の幻になつてすうつと心の面を走り過ぎた。と、彼女は自分の運命がもう其處まで窮迫して來てゐるのをその時明かに意識して、俄に何とも云はれぬ恐怖に襲はれた。そして激しく惑亂してくる胸を静め兼ねて、突如毅の肩に縋りつきながら、

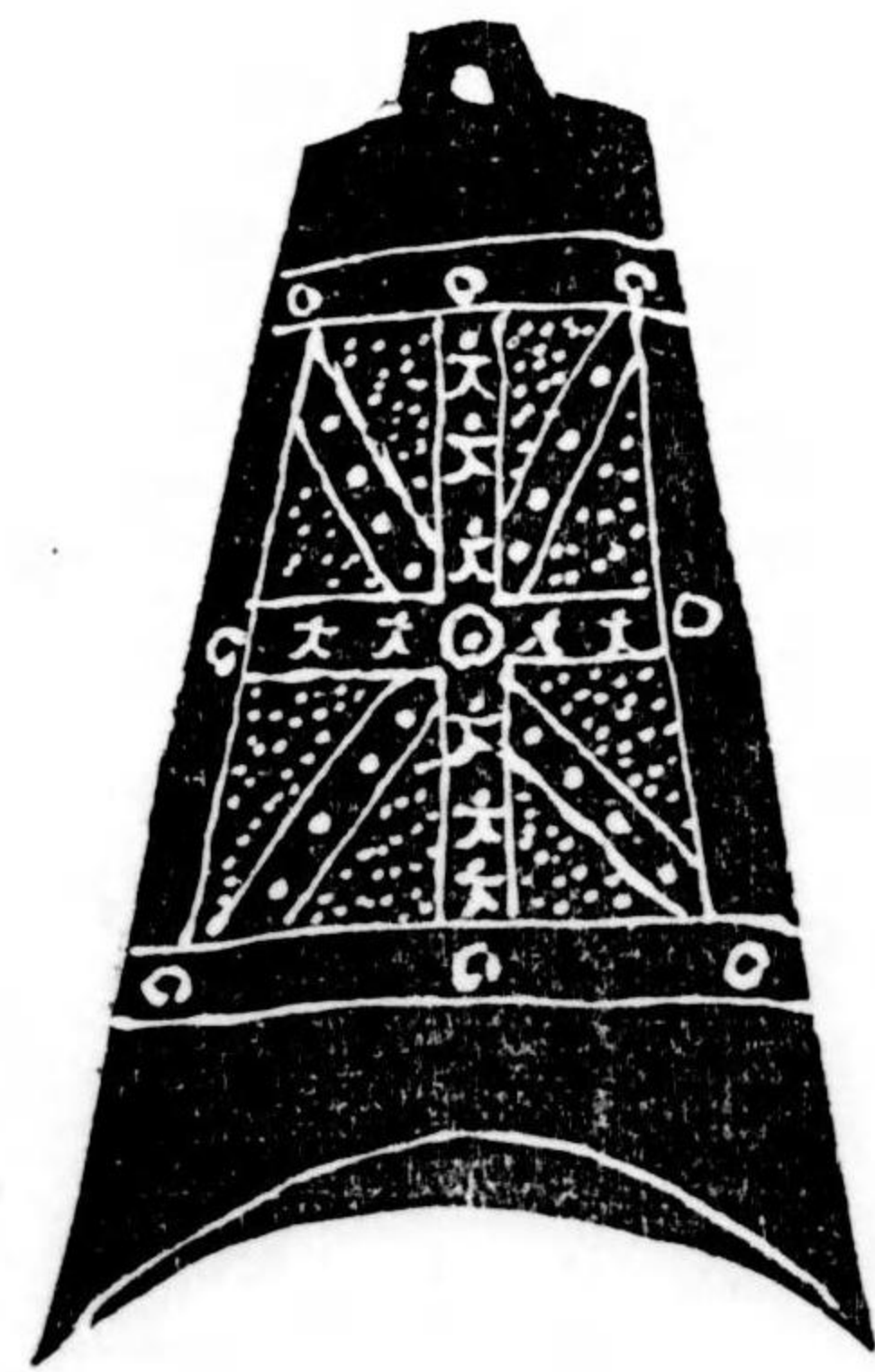
「もう駄目です。もう駄目です。」と聲をあげて泣き出した。

毅ももう慰める言葉さへなくなつてその儘自分も啜泣しながら唯しつかりと俊子の胸を抱きしめてゐた。漸次と激しい歇斯的利亞の發作に陥つて行く彼女は埒もないことをぶつぶつ呟きながら終には殆ど失神したやうになつてぐつたり毅の膝の上へくづをれて來た。そして彼の洋袴もひたひたと濡れしをれるばかりに泣き續けた。

店の方では郵便脚夫が女達に押搦つてゐるのか、時折どつと笑ひ崩れる聲がかすかに聞えてゐたが、それもいつの間にかふつりと止んで、夜はしんしんと更け渡つて來た。そして遠くへ吹き落ちてゆく風の音と一緒に樹枝の搏ち

合ふ悲鳴が物凄く斷れ斷れに聞えて思ひ出したやうに雪がさらさらと窓硝子
を掠めてゆく。ストーヴの火もいつしか白く崩れて、寒氣は冽るやうに轟々と
脊中から滲み込んで來た。

音鈴・機馬



その晩は二人ともストーヴの傍へ坐つた儘で冷たい一夜を明かしてしまつた。

翌朝になると先へ乗り越した叔父達からか若くは東京の方からか搜索の手が今にも廻つて來さうな氣がして、逆もあちあちしてゐられないので、彼等は人目を忍ぶ身の是非もなさを嘆きながら朝飯も食わずに遁げるやうにその宿屋を出た。初めは何處か鐵道の沿線から離れた町へでも行つて隠れられるだけ隠れてゐる手筈に極めたのであつたが、吹雪で交通は杜絶してゐるし、それにその附近にはこれと云ふ町もないので、彼等は汽車に乗つて人氣離れた隠棲を探して歩くより他には詮方がなかつた。

吹雪は昨夜ひと夜で吹落ちて、薄明るい曉方の光りのなかには唯粉のやうな雪ばかりがちらちらと夜で吹落ちて、薄明るい曉方の光りのなかには唯粉のやうなく小高い吹溜りが出來て、そこらにはたつた一條の人の足痕が薄く残つてゐる

ばかりだつた。彼等は呆れたやうな顔つきをして見送る女達の聲を後に聞き捨て、ともすると股のあたりまで滑り込む歩き難いあら雪のうへを停車場の方へとぼとぼと歩いて行つた。

停車場はもう開いてゐた。薪を焚いたストーヴの前には此の附近の移住民らしい農夫と、驛員がたつたふたりで對向ひに坐つて、薄暗いなかで正月の噂などを聲高に語りあつてゐた。そしてブラットフォームや線路の處では頭からすつぽり外套を引被ぶつた人夫達もうせつせと雪を掻いてゐた。

彼等は人に顔を見られるのさへ恐ろしくて怪訝さうにじろじろ此方を見る驛員の腫を避けながら待合室の隅の方へ腰を掛けた。そして新な驛員や人夫達が顔を出す度に、何か云ひかけられさうな氣がしてひやひやしなからそつと顔を背けた。

驛員達の話しをそれとなく聞いてゐると、この吹雪で電信も電話も昨夜から一切不通になつてゐるらしかつた。そして汽車も上り線下り線を通じて大分延着してゐるやうな様子だつた。そしてこれから先の山地へ入ると、積雪が四

尺の上を越してゐるといふやうな話も聞えて来た。

彼等はそれを聞くとひどく落膽もしたが、それと同時に搜索の手が一時そのために阻まれるのを思つて、何とない安心も覺えた。お互に口へは出さずに、心の底ではいろいろな杞憂やら、恐怖やらに責め苛まれてゐたが、もう今になつて何うする事も出来ないのて、兎に角その儘汽車の來るのを待つた。

二時間餘りも焦々しながら待つてゐるうちに、俱知安發の一番列車が三時間の餘も遅れてやつて來た。雪除けの突角には雪が氷山のやうな形に盛上つて、吹き鳴らす汽笛の音さへ難路を思はせるやうに疲れきつてゐた。そして僅か二臺の客車の後へ連結した幾臺かの貨車には、赤毛布や古外套を被つた臨時除雪人夫がうぢやうぢや押し合ひながら乗つてゐた。

彼等は行先と云つても別に當てはないので、仕方なしに兎に角函館までの切符を買つた。そしてその儘改札口へ出ると、昨夜切符を調べた驛員が出て來て、鉄を入れて呉れたが、唯にやにや變な笑ひ方をしたゞけて何とも云はなかつた。列車に乗る前に彼等は云ひ合はせたやうに不安さうな顔をしながらひとわ

たり車室のなかを覗いて歩いた。ひよつとかしたら叔父が何處からか引返してきてそれに乗つてゐるか、それとも搜索を依頼された警察官かなにかと乗つてゐやしまいかと云ふ恐れがあつたが、幸ひそれらしい姿もみえないので、やつと安心して乗つた。

二

長萬部紋別を過ぎて、寂しい噴火灣の斷崖の上へ來懸ると、南の方から少しづつ雲切れがしはじめ、野田追へ來る頃にはいつの間にかもうすつかり蒼空になつてしまつた。際涯もなく廣がつた大洋の面は蒼々と澄んで、灰色をした名も知れぬ海鳥が高く低く餌を漁りながら飛びつれてゐる。そして長々と海上へ突出した駒ヶ嶽の裾野には薄い日射しが射しかゝつて、荒寥とした積雪が斑を描きながらきらきら輝きだした。

彼等は何處かへ降りなければならぬとは思ひながら、停車する村々がいづれも宿屋ひとつないやうな寂しい新開地ばかりなので、到頭その儘焦々しながら

乗續けてゐた。山角へ登つたり海岸へ下りたりする度にいかにも未開地の僻地らしい駒ヶ嶽の裾野や噴火灣の紺碧ばかりが果しもなく眼の前へ立塞がつて来るので、しまひには云ひ知れぬ絶望さへ覺えて、此れから先にはもう自分達を隠匿つて呉れる隠棲もないのではあるまいかと云ふやうな行詰めた氣持にならずにはゐられなかつた。

俊子は到頭我慢しきれなくなつて、

「ねえ、貴方。何處でも構はないから降やうぢや御座いませんか愚圖々々してゐると函館まで行つてしまひますわ。函館まで出てしまつたらまた何んな面倒が起らないとも限りませんから……。」と端には聞えないほどの小聲で毅の耳へ囁いた。毅は仕様がなさうに黙つて合點いた。

森へ着くと、二人は何方からともなくすつと起ち上つた。そして黙つて顔を見合はせながらその儘到頭列車を降りてしまつた。

停車場から町へ出ると、そこも相變らず店家さへないやうながらんとした處だつた。板張りの小舎のやうな低い家並が穢しく建ち續いて、粗末な風装をし

た住民達は譯も分らぬ聲で喚きながら往來の雪を掻いてゐた。

彼等は何うする當もないので、またぶらりと停車場へ歸つて来て、ブラットフオームの地續きにある待合所へ入つた。そしてその時になつてひどく空腹を覺えて來たので、ストロップにあたりながら其家て出来る蕎麥を取つて食べた。

その時、ふと沖の方からかすかに汽笛の聲が聞えて來た。硝子戸になつた窓から覗くと、今迄は氣づかなかつたが、線路のすぐ彼方には低い渚に棧橋が懸つてゐて、そこから五町ばかりの沖に百噸ばかりの小蒸氣が黒煙を吐きながら碇泊してゐる。

毅はそれをみると何かいゝ方法でも思ひついたやうに待合所の主人の方を振顧りながら、

「あの汽船は何處へ行くんだね？」と訊いた。

と、主人は分りきつたことを云ふやうな顔容をしながら、

「ありや室蘭通ひですよ。」と膠もない聲で答へた。

「ふむ、あれが室蘭へ行くのか。」毅は益勢ひを得て今度は俊子の耳へ口を寄せ

ながら、

「何うです、此儘室蘭の方へ渡つてしまひませうか？」
俊子は黙つて合點いた。

三

室蘭行き汽船は午後の三時に出帆すると云ふので、彼等は愈々それに乗つて向地へ渡つてしまふ氣になつた。併しそれにしてもまだ出帆までには随分時間があるので、それまで何ういふ方法で時を消すかといふことが差當つての問題になつて來た。俊子はうつかり此様な處にうろろしてゐて、若し次の上り列車で叔父が引返して來てもしたらそれこそ直に見付かつてしまふし、それにこんな端近かにゐては人の眼にも立ち易いと云ふので、頻りに何處かへ體を隠すことを主張した。毅も無論さうしななければならぬと思つてゐたので、彼は思ひ切つて宿屋の有無をその主人に訊ねた。

と、主人はすぐ停車場の向側にある運送屋を指さして、

「彼處が宿屋をしてゐます。今日あたりや客がねえから明いてませうよ。」と云つた。

さう云へば成程その軒先には旅館の看板が出てゐる。併し家の見つきといひ、殊に運送屋といふ別な商賣をしてゐる店なので、何となく氣が進まなくて、彼は、

「もう少ししい、宿屋はないかね。」と重ねて訊き返した。

それを聞くと主人は頑固な顔になつて、

「他にやねえですよ。室蘭へお出でなら切符も此處で出しますから、いつそさうしてゐたらどうですな。」と云つた。

彼等はさう云はれると他に仕様もないので、その儘主人に禮を云つてそこを出た。そしてその足で雪道を眞直に運送屋へ行つて店口に坐つてゐた番頭に座敷の有無を訊ねた。と、その番頭はそこいらの者にしてはいかにも客馴れた調子で店とは別な松飾のしてある入口から叮嚀に彼等を二階座敷へ案内して行つた。

なかへ入つてみると、運送屋とはまるで別棟になつてゐて、可成り古びた穢ろしい座敷ではあつたが、床の間や押入れがついてゐるだけでも昨夜の宿よりはるかに増してあつた。そこへ入ると、毅は精も根も盡き果たやうにぐつたり打倒れて、矢鱈と嘆息ばかり吐いた。それを見ると、俊子も急に張り詰めた氣が緩んで、又さまざまなことを思ひ出しながらいつか涙含んでしまつた。

婢達が茶や菓子置いていつてしまふと、やがて又番頭がやつて来て宿帳を出しながら、

「何うか濟みませんが、お名前を。」と云つた。

毅は偽名などを考へて置く隙がなかつたので、何の氣なしに東京の邸のある町名を云つてしまつたが、ふと氣づいて眞紅になりながら、

「いや、さうぢやない、内幸町だ、内幸町だ。」と慌たゞしく云ひ消して、さうして名前は園田映雄と云ふんだ。」と添け加へたが、その名前も後で思ひ返してみると、矢張り毅と同窓だつたさる法學士の名だつた。それが彼にはひどく氣になつた。

番頭は何にも氣づかないやうな顔をしてそれを記けてしまふと、今度俊子の方を向いて、

「それから奥様のお名前は？」と、叮嚀に訊いた。

先からさう云はれてみると、仕方がないので、俊子は園田映雄の妻はると云ふ名で宿帳の面へ記された。そして番頭がいつてしまふと二人は顔を見合せて何と云ふことなしに紅くなつた。

四

汽船の出帆間際になるまで、彼等はその座敷で漸次と西へ廻つてゆく弱々しい日射しを眺めながら、ぼんやり寝たり起きたりしてゐた。そのうちに時間は容赦もなく迫つて、階下からは番頭が最後の舳の支度が出来たと云つて呼びに来た。

それを聞くと、彼等は急にそわそわ身支度をしだしたが、ふと見ると硝子窓の彼方にみえる棧橋の上には、異様な人の姿がまるで鴉のやうに突つ立つてゐる。

それはどう見ても二人の巡査だつた。と、その途端に俊子は眞蒼になつて唇の色まで失ひながら、

「何うしませう。きつと私達を捜してゐるんですわ。」と慄え聲で云ひながら毅の胸へ寄り添つた。

毅も訝しむやうにじつと棧橋の方を見下してゐたがやがて、

「まさかそんな事もないでせう。」とあやふやな聲で云つて、兎に角彼處まで行つてみませう、それではないと若しあの船に遅れたら何うすることも出来やしませんからね。」

「いえ、いえ、可けません。そんなことを仰有つたつて、若しひよつとしてあれが私達を捜しに來てゐる巡査だつたら、すぐに捕まつてしまふぢや御座いませ

んか。こんな晝日なかに人の見てゐる前で捕まりてもしたら何うなすつて？」俊子は袖で顔を掩ひながら泣き聲で云つた。

「そんな聲を出しちや階下へ聞えるぢやありませんか。静かにして下さい。」毅は俊子の口へ手を掩ふやうにして、

「そりや貴女の思ひ過ぎですよ。僕達を捜す巡査なら彼様な處にいつまでも愚圖々々してゐるもんですか。いくら警察の手廻しが早いと云つたつて僕達が今こんな處にゐるのが何うして分るでせう。」

「いえ、私は厭て御座います。もう室蘭へ行くのは厭て御座います。」俊子は到頭肩を慄はしてしくしく泣き出してしまつた。

そこへ又階下から番頭が催促に上つて來た。毅は何うすることも出来なくなつて、到頭室蘭行きを思ひ止まつて番頭には急に俊子の體の工合が悪くなつたやうに云ひこしらへてその儘解舟の方は斷らせてしまつた。

二人はそれから長いこと口を噤んだなりで對向ひに坐つてゐた。何うしようと思ふ考へはまるで浮んで來ずに心は漸次と暗い方へと沈んで行つた。そしてしまひには泣くにも泣かれないやうな突詰めた氣が頻に喉元へ込上げて、居ても立つても耐らぬ不安が眼の前へ暗く壓しかゝつて來た。

そのうちに黄昏はいつしか夜になつて、四邊は怪しげな雪明りと一緒にとつぷりと暮れてしまつた。階下からは婢が洋燈を持つて來たがその薄ぼやけた

光を見ると毅は愈じつとしてゐられなくなつて、いろいろに俊子を宥め慊しながら善後の處置を定めやうと力めた。

俊子も初めのうちは氣が狂つたやうに埒もないことばかり云ひ續けてゐたが、そのうちに漸次と鎮靜して來て毅の云ふことも一々聞き分けるやうになつた。そして兎に角斯うしてゐては一刻の間も搜索の手が案じられるので、この儘此處を立去つて出來るだけ早く安全な隠棲を求めようと云ふことに考へが極まつた。併しそこで困るのは行先よりもそこへ行く手段であつた。汽車に乗ると云ふことは何となしに危険の見え透いた恐れが先へ立つので今の場合到底敢てし得ないし、と云つて此の雪では他に藉りる可き交通機關もないので、これには二人ともほとほと思案に盡きてしまつた。

五

思案に餘つた揚句、彼等は詮方なしに番頭を呼んで相談してみた。と、お世辭のいゝ番頭もさすがに當惑して、この雪では無論車は通はないし、通ふものと云

つては唯馬櫓があるばかりだと云つた。

それを聞くと毅は書でみた露西亞あたりの馬櫓を思ひ起しながらひどく喜んで、幾ら賃錢を拂つてもいゝから是非とも夫を一臺備つて呉れと頼んだ。

番頭は益當惑して、

「旦那方はまだ此地の馬櫓を御覽になつたことがないんで御座いませう。此地で馬櫓と申しますと、薪や氷を運ぶのに使ひます極粗末なもので、内地で申せば荷馬車のやうなものなんで御座いますよ。」と薄笑ひを洩らしながら云つた。「いや、何んでも可い、乗れさへすればいゝんだから。」毅はもう一途に迫き上げて云つた。

「でも、そりや迎もお乗れになれや致しません。それに明日はもうお正月で御座いますから出る櫓があるか何うだかそれも分りませんし……。」と云つて、番頭は今更らしく毅の顔を不思議さうに見ながら、「一體旦那方は何處へお出になるんで御座いますか？」

それを聞かれると彼ははたと行詰まらない譯にはいかなかつた。東西の方

角も分らぬ未知の國で、何處へ行つたら何うした町があるかさへまるで當てがつかないの、彼は唯口から出任せを云ふより他はなかつた。で、兎に角俊子の體が急に悪くなつたので何處か静かな温泉場へでも行つて暫らくの間保養して來度いと云ふやうな、自分でも理の詰まらぬ口實を作つて反對にさうした町の所在を番頭に訊いた。と、番頭は怪訝な顔をしながらも笑つて、

「さう云ふのでしたら此處いらではまあ大沼が一等宜しう御座いませう。彼處は御案内の通り山の上の湖ですから非常に閑静ですし、それに旅館もいゝのが御座いますしな、さうして汽車の便利もまことに宜しくつて、そんな馬櫓なんかでお出にならなくつたつて此地からたつた三驛ほどの上りて御座いますから……」

「いや、その汽車が困るんだ。此の人の病氣にはステイムの温氣に蒸されてごとごと揺られるのがひどく障るんだ。寧ろ寒い外の空氣に觸れるやうに馬櫓で行く方がいゝんだ。」毅は自分でも辻褃の合はぬ話したとは思ひながら、もうそんな事には構つてゐられなかつた。

毅が餘り頑固に嘆願するので番頭も仕方なしに言葉を折つて、

「ぢや兎に角捜させてみますから。」と云ひ捨て、階下へ降りて行つた。

二十分ばかり経つと、往來の方で寂しい鈴音が聞えて、やがてまた番頭が上つて來た。そして幸ひ大沼へ歸る氷運びの馬櫓が一臺あつたから一應見て呉れと云つて、その儘毅を案内して店口の方へ連れて行つた。

店口には薄明るい雪明りのなかに瘦馬をつけた粗末な馬櫓が來て止つてゐた。成程番頭の云ふ通り板で圍つた荷馬車のやうなもので、なかには正月に使ふらしい酒樽や干魚の菰包みのやうなものが一杯積載してあつて、その後の處にやつと二人並んで坐れる位な空處がとつてあつた。

毅は乗りものゝ善悪などを問うてゐる場合ではないので、直ぐさまそれで大沼へ向ふことに取極めて、俊子にも急いで身支度をさせた。そして番頭が過分に貰つた祝儀の禮心てか、毛布を貸して呉れたので、荒菰を敷いた櫓の底へそれを二つ折りに重ねてその上へやつと窮屈さうに腰を卸した。

馬櫓はやがてもの寂しい鈴音を殘しながら、樹枝に密着した雪がぱりぱり音

をたて、凍つてゆくやうな鋭い寒氣のなかを、町端れの方へ向つて眞幕に駛つて行つた。

六

馬櫓が進むに従つて、荒寥とした駒ヶ嶽裾野の大傾斜が漸次と眼の前に開けて来た。見る限り唯茫漠とした一望の雪原で葉の落ち盡くした刺々しい針葉樹の群れと、火山力の餘勢を示す斷層の起伏とが僅かに雪の面に創痕のやうな黒ずんだ影を描いてゐるばかりで、薄闇に閉ざされた四邊には村里の灯ひとつ瞬いてゐない。そして雪原に續く大空には時折雲斷れがして、その都度に凍えたやうな寒月が射しそふので、照らされた限りの雪の面は蒼ざめた冷たい色にきらきらと輝いた。

彼等はその大雪原の面を照らしつ薄れつ喘ぐやうに流れてゆく月光を見渡してゐるうちに、何とも知れぬ悲壯な氣持になつた。親を捨て家を捨て、世間を捨て、こんな遠い北の國の雪路も當もなく流浪して歩いてゐる自分達の姿が

今までになく憐れに映つて来た。思ひ捨て、来た家のことも思ひ起される、それを取圍む大都會の輝かしい光も思ひ起される、そして相互に口にこそ出さないが、かうなるまでの生ひ立ちから、さまざまの懐かしい思ひ出までが一々走馬燈のやうに次々と思ひ起されて、これから先の暗い運命を思ふと涙も出ぬ絶望がやがて纖弱い心を打碎くやうに迫つて来た。

漱はきつと唇を噛みしめて頬に涙を呑んでゐたが、そのうちにふと氣づく、俊子はいつの間にか菰包みの上へ突俯して、肩を竦めながらかすかな呻めき聲をたてゝゐる。その様子が餘り變なもので、彼は訝しみながらそつと耳へ口を寄せて、

「何うかしたの？」と訊くと彼女は言葉も出ないやうに苦悶しながら唯兩手で胸を抑へてみせた。餘りの心勞と寒氣で、彼女は激しい胸痛を起こしてゐるのであつた。

藥の用意は固よりなし、それにこんな曠野の眞幕中では權から下ろして休ませる人家もないので、漱は途方に暮れながら、

「もうそんなに遠くはないんだから、何うか氣をしつかり持て我慢して下さい。彼地へ着きさへすれば、醫者もゐるだらうし、それに宿屋には、温かい温泉もあると云ふのだから……。」と一生懸命な聲で慰めて、窮屈ななかで後から手を廻して、彼女の胸の處を力一杯に抑へてやつた。彼女はそれていくらか痛みも和いதாகして、力なく毅の膝のうへへくづをれながら頻にしくしく泣き續けてゐた。森から、彼此れ二里餘りも登つたと思ふ頃になると、何うしたものか空はまた一面に搔曇つて來て、粉雪と一緒に濃い霧が少しづつ四邊を引包んで來た。そして今迄は遠くてかすかに呻めきながら吹いてゐた風も、ぱつたり死んで、人住まぬ郷國を思はせるやうな沈黙が天にも地にも漲り渡つて來た。積雪を蹴る馬の蹄の音と、櫓の刃の滑つてゆく音が、その沈黙の底に物凄く滲み入つて、寂しげに鳴り續ける鈴の音は何ものかを呼ぶやうに遠く遠く響いてゆく。霧はみるみるうちに漸次深くなつて來た。そして終にはともすると馬の首のあたりさへそれと見え分かぬ程に濃く迫つて來たので、櫓曳は道に踏み迷ふのを恐れて、到頭その儘大雪原の唯中に櫓を止めてしまつた。そして手綱を首

に懸けたまゝ、

「此の霧はぢつきに晴るなあ。」と呟きながら吞氣さうに煙草に火を點けた。

その途端に、憂慮に沈んだ毅の耳にはふと異様な聲が聞えた。耳を澄まして聞くと、何處か濃い霧の彼方から、

「おうい。おうい……。」と人を呼ぶ聲が遠く斷れぎれに聞えて來る。ひとつ聲が大雪山原の沈黙に消えたかと思ふとまた次の聲が、

「おうい。おうい……。」そしてその聲は漸次と此方へ近いて來るらしかつた。毅はぞうツとした。

七

少時すると、彼等の通り過ぎて來た道の方からさくさくと雪を踏む馬の足音が聞えて、提灯の火がぼんやり霧に滲んで來た。

「おうい……。」ともう一度呼ぶ聲がすぐ間近で聞えたが、櫓曳がやつとそれと氣づいて返答をしたので、追驅けて來た馬は櫓から二三間離れた處ではたと止

つた。

「おい、仙か？」と前の馬からは仲間らしい男が聲を懸けた。と、橋曳はその時になつて漸く橋から下りて。

「う、俺だ。何か用かね？」と云ひながらそつちへ歩いて行つた。

「や、仙だ、仙だ。まあお前どら程探したか……。その男はほつと安心したやうに叫んで、提灯を持つたまゝ、馬からひらりと跳び降りながら、お前の乗せて行つた客人に警察の旦那が急な用事があると云はつしやるんで、俺あ大急ぎで後を追つ駆けて来たゞが、お前もえれえ人を乗つけたもんぢやねえか。ありや、驅落者だと云ふぜ……。」

その聲と同時に後の馬からは又誰れか、降りて来たが、眞黒な外套の下でかちやかちやと約ましやかに鳴るのは正しく巡査の佩劍であつた……。

毅と俊子は斯うした思ひ懸けない無人の大雪原の唯中で、到頭搜索に來た警

吏の手に抑へられてしまつた。もう此の場になつて反抗することも遁走することも出来ないで、彼等はそれから間もなく馬上の巡査に監視されながら、又もと來た道をそろそろ森の方へ下りて行つた。霧は益々深くなつて來るので、案内に立つ若者はたつた一つの提灯の火を頼りに、雪の上に残つた足痕を捜しながら手綱を引締めひきしめ、彼等を導いて行つた。

橋の上では俊子の啜り泣く聲ばかりが断れぎれに聞えてゐたが暫らくすると、突然、四邊の静けさを劈いて、鋭い一發の銃聲が響き渡つた。端の者達は慄乎として、突如橋の方へ振り返つたが、その時、

「うむ……。と息を引くやうな俊子の呻めき聲がして、又一發の火花がぱつと闇に散つた。

巡査は、

「提灯を、提灯を。」と叫びながら直ぐさま馬から跳び降りて橋へ近寄つたが、その刹那、毅がちらちら光る短銃を我れとわが眉間へ當て、今にも放たうとしてゐるので、突如飛び懸つてその腕を強く執つて抑へた。

殺は執られた腕を振廻らうとして、

「離せ、離せッ。」と死物狂ひになつて争つてゐたが、ふとした途端に狙ひも定めずに又一發放つた。その銃聲と一緒に彼は體を棒のやうに仰反らしてその儘ぐつたりと短銃を持つた腕を垂らしてしまつた。

提灯の火を差寄せてみると殺は蜂谷から腦を撃貫いて、白齒をむき出したままもう全く息絶えてゐた。俊子の方は何處を撃たれたのか創口は着物に隠れて見えなかつたが、それでも唇からは二筋ほど血を滴らして、手足をびくびく拘攣らせながら斷末魔の苦悶に喘いでゐた。

それを見ると巡査は聲を振絞つて、

「貴女、貴女。」と呼んでみたが、彼女はもう漸次と眼を落してゆくばかりで、その聲がその胸に響かうとは思はれなかつた。

「あゝ、もう駄目だ。」巡査はやがて提灯の火を後へ引きながら嘆息を吐くやうにかう呟いて、度を失つた櫓曳や若者と一緒に、死に掩はれてゆく俊子の顔を呆然と眺めた……。

それから十分も経たぬうちに殺と俊子の空しい屍骸はもとの如く櫓へ載せられた儘再び雪の上を滑りはじめた。眞闇な雪道にはまだ往路の足痕が鮮かに残つてはゐたが、其上を行く同じ櫓の刃は既に遠く遠く生死の境を越えてゐた。そして断えず鳴り響く鈴の音も、永遠の路を行く時の歩みのやうに濛々と立罩めた霧の彼方へ寂しい律を刻みながら消え去つて行くばかりで、新しい年の曉は遂に二人の屍骸さへ照らさなかつたのであつた。

大正三年五月十四日印刷
大正三年五月十七日發行

定價壹圓五拾錢

著作權
所有

著作者

長 田 幹 彦

發行者

東京市麹町區下六番町十三番地
松 前 岩 太 郎

印刷者

東京市京橋區西船場町二十七番地
佐 久 間 衛 治

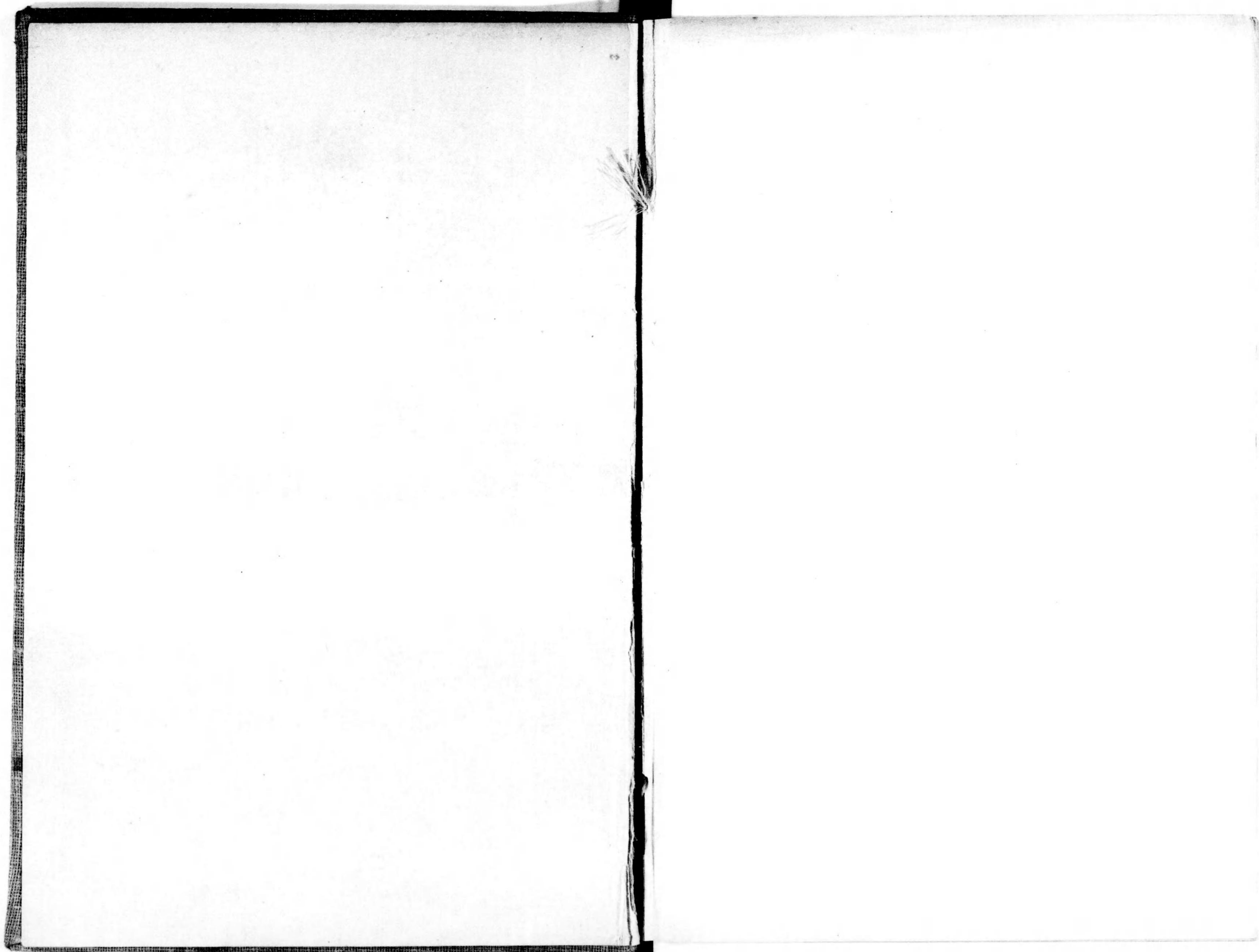
印刷所

東京市京橋區西船場町二十七番地
株式會社 秀 英 舍

發兌元

東京市麹町區下六番町十三番地
九九書房

(振替口座東京二七九〇〇番)



2716
578

終

